とりあえず、畑でもつくろうかな

蓮椰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とりあえず、畑でもつくろうかな

【Ｎコード】
Ｎ２５００Ｏ

【作者名】
蓮椰

【あらすじ】
世界の綻びにより亜空間が発生し、乗っていた飛行機が吸い込まれてしまった。行き場をなくした飛行機の中の人間たちは、神様たちによってそれぞれ異世界に飛ばされることになった。これは、その中の一人のお話です。
小説初投稿です。誤字脱字や表現のおかしいところがあるかもしれませんが、生暖かい目でみてください。

第２章が終わりました。これから第３章に入ります。

現在大幅改訂中です。１章が改訂終了しました。第２章の改訂はちょっとお休みして、第３章を更新中です。

御礼企画として連載中ものが、『とりあえず』シリーズにありますので、そちらの方も見ていただけるとうれしいです。

【随時更新】人物紹介＆設定

?:人物紹介

『マリス・カトリーヌ・シュタイン』
現在１４歳。シュタイン子爵家の跡取り。

容姿：
髪は、茶色を透明にしたような色で光にかざすと金色に輝いている。
髪の長さは、緩く巻いた状態で背中にかかっている。（ストレートに伸ばすと腰にくる）
肌の色は、薄クリーム色で自ら配合した日焼け止め薬により、日焼け対策は万全なので白っぽい。
絶世の美女ではない。上中下で美人度をわけるなら、上の中の下というくらい。８０％の人がきれいだというレベル。しかし、農作業のための服装のためいろいろと台無しになっている。

７歳のとき、シュタイン家の養子となる。
１１歳のとき、秘密裏にコメの栽培に成功する。
１２歳のとき、白いごはんを食べる。
１４歳のとき、コメの特許取得。そして現在に至る。

前の世界では、休みなくバリバリ働いていたので、今度の世界ではのんびり過ごしたいと思っている。
しかし、少々熱しやすい性格のため、今後どうなるか分からない。
当初は、『しろいごはん』をたべるために、この世界の畑知識を習

得していたが、今では農作業がとても楽しいと思っている。
現在ではマリスもすっかり忘れているが、『どんな植物でも栽培できる技術と力』がある。この能力によって、たった3年でコメを販売できるレベルにまで栽培した。
『自分の思い描いた植物の種を手のひらの上に創造する能力』のほうは、だいぶ使えるようになってきた。（1週間に1粒だせる。）
しかし、リスクが高いことには変わりないので、あまり使っていない。

『イピサ・オリビア・ヴィ＝シュタイン』
シュタイン家当主。当代シュタイン子爵。現在65歳。
昔、娘を亡くしている。シュタイン家の跡取りがいないため、孤児院からマリスを引き取り養子にした。分家から、養子を取らなかったのは、適切な人材がいなかったからだといわれている。
植物全般に対して造詣が深く、研究院の名誉講師も勤めている。
自分に厳しく、他人に厳しい。しかし、やさしいところも多いので、多くの人に好かれている。

『セバス・クルスチャン』
シュタイン家執事。年齢不詳。実は、シュタイン子爵より年下だがかなり老けて見える。
有能で、あらゆる雑事をこなす。屋敷には隠し通路が多くあり、その通路を使ってすばやく移動している。マリスも隠し通路の存在をセバスに教えてもらっている。

『オメガ・ギルディック』
シュタイン家のメイド。料理兼掃除をしている。４０代の女性。

『オクト・ギルディック』
オメガの双子の妹。洗濯兼掃除のメイド。

『ジョンソン』
色黒の引き締まったボディを持っている。門番兼御者・家畜世話係。
現在３５歳で、妻子もち。子爵家には２０年前から仕えている。

『エルジイ・アンタレス』
「放浪の狼」という二つ名を持ち、「武術の達人」とも呼ばれる。
武術のエキスパート。現在では、シュタイン家の庭師兼警備員をしている。
どんな気配でも読み取ることができる。

『リバス・クルスチャン』
執事のセバスの弟。セバスより2歳年下だが、そっくり。初めてみる人は必ずセバスと間違えるほど。
妻のハリアと共に、シュタイン家の領地で農場を管理している。

『ディーク・フレデリック・オランジュ』
マリスが孤児院でお世話になった人物。
オランジュ家の準貴族。カラクリ工学を極めるためにオランジュ家の援助で研究院にいる。

?国
マリスのいる国は、グレントリーズ王国。貴族と準貴族によって管理されている。

といっても、厳しい身分制があるわけでもない。貴族といえど、浪費すればすぐに没落する
特に機械が発達しているわけではない。人の発する微弱な精神力（気のようなもの）でカラクリを動かし、生活に利用している。

?貴族について

貴族の爵位

公爵（当主は姓の前に『ラ』がつく）
例：モモ・タロウ・ラ＝キビダンゴ　（キビダンゴ公爵）

侯爵（当主は姓の前に『ヴェ』がつく）
例：ブロント・エレルッサ・ヴェ＝クリスチャール　（クリスチャール侯爵）

伯爵（当主の姓の前に『セ』がつく）
例：イツ・スン・セ＝ホウシ　（ホウシ伯爵）

子爵（当主の姓の前に『ヴィ』がつく）
例：イピサ・オリビア・ヴィ＝シュタイン　（シュタイン子爵）

男爵（当主の姓の前に『ウ』がつく）
例：アルツ・ファイナ・ウ＝ヴェルトシュタイン　（ヴェルトシュタイン男爵）

建国当時に功績のあったものは、侯爵～子爵になった。後に、準貴族から爵位をもらったもののほとんどは、男爵位である。

【随時更新】人物紹介＆設定（後書き）

人物紹介1と2を削除し、こちらにまとめました。

プロローグ（亜空間発生）（前書き）

はじめまして、蓮椰です。

現在脳内プロットしかないので、頑張って書いていきます。

（残酷表現ありは念のためつけました。たぶんこの作品ではほとんどないと思われます。）

プロローグ（亜空間発生）

神や精霊と呼ばれる存在が、多くいる聖域にて、話し合いという名の神通力のぶつけ合いが起きていた。

通常、神通力をぶつけ合うことで新たな相乗効果や神が発生する。しかし、今回の場合は誰の力が強いかを競うためだけに行われている。

所謂、ただのケンカである。

もちろん、それは良くないことの訳で……。

「大馬鹿者！何をやっとるんじゃ！」

神々をまとめる大神に神通力のぶつけ合いを発見をされてしまった。さらに悪いことに、大神は怒鳴り声とともに、神通力を放ってしまった。

大神の力がトドメとなり、世界に綻びが生じた。綻びは、亜空間をつくりだした。

亜空間は放っておくと、広がり世界を飲み込んでしまう。

「皆の者、一気に塞ぐのじゃ」

慌てて、大神を筆頭に周辺にいる神々（神通力のぶつけ合いをしていた神・傍観していた神）が亜空間の入り口をふさいでいく。
あっという間に亜空間が小さくなっていく。

しかし、あと少しというところで、空中を高速移動する物体が中に吸い込まれるように、亜空間に入っていってしまった。

小さくなった亜空間の中で、異物を探し出すのが容易かったが……

「コレ、人間の飛行機じゃないですか？」
「『飛行機』とはなんじゃ？」
「アレですよ。人間が沢山のっている乗り物ですよ。」

よく目を凝らしてみると、中には、人間の魂がひしめき合っている。
そのまま、外に出すと、すぐに飛行機は落下してしまうだろう。

黄泉の神曰く、「この人間達は寿命が尽きていないから、そのまま輪廻に戻せない。」
時の神曰く、「神がかかわっていることで、時間を戻せるわけないでしょう。」

どうやら、解決策がないようです。このまま、魂ごと消滅させるのは良くないし（自分たちのせいで多くの魂が消えるのは、良心が痛む。）

繋ぎの神曰く、「異世界に、送ればいいんじゃないですか？」

ということで、神々は人間の魂を異世界に丸投げすることに決めました。

プロローグ（亜空間発生）（後書き）

すいません、主人公がまだ出てきてません><

1．ブラックアウト（前書き）

まだ、異世界に行っていません。

1．ブラックアウト

飛行機が、白い雲の上を滑るように飛んでいる。地上では、にごった雲が広がり雨が降っているが、飛行機から見る空は至って快晴である。

茉莉はそんな空をシンガポール帰りの飛行機から眺めていた。修学旅行のときは、白い雲を見て感動したものだが、今では見慣れた風景になっている。

家に帰っても出迎えてくれる人はいない。2年前、両親は交通事故により亡くなっている。すでに自立し、残されたマンションのローンはあと少しでなくなる。生活には、支障はなかった。あるのは……喪失感と孤独。もうそれにも慣れてしまった。

CAのお姉さんにコーヒーを頼み、飲みながら、再び窓の外を見てみる。

するとそこには……闇色の雲が膨らんでいた。

闇色の雲が、飛行機の中まで侵食したところで、茉莉の意識は途絶えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

茉莉は真っ白な世界に倒れていた。

周りも足元も白く、距離も分からない。

起き上がって、歩こうとして……

ゴツッ

「ぐえっ」

「イタッ」

茉莉は「ぐえっ」という自分以外の声に驚き、足元を見る。

そこには、頭を抑えた女の子と大柄な男性がいた。

「こんにちは、目覚めたみたいね。ったく、なんでそんなに石頭なの！？」

女の子は涙目だ。

「変な現れ方をするお前が悪い。」

「だって、さかさまに現れたら、面白いかなって。」

どうやら、彼女はさかさまに上から現れたらしい。

「とりあえず、事情説明するぞ。そこの女。お前は、もう戻れない。異世界に行くことになった。」

大柄な男性が、茉莉を指差しながら、そう宣言した。

「・・・・・・」

茉莉は、何を言われているかよく分からない。

反対に理解できる方がすごいだろう。

「……それじゃ、説明としては、不十分でしょ。私の方から説明するわ。」

女の子は腰に手をあて、ため息をついた。

「頼む。」

「まず、自己紹介からいきましょうか。私は、植物の神よ。こっちのでっかいのが、農業の神よ。あなたの乗っていた飛行機がこの世でもあの世でもない亜空間に吸い込まれてしまったの。だから、もとの世界に戻れないし、黄泉の世界にもいけない。だから、魂ごと異世界に転生させるってことよ。」

「なにそれ？」

おもわず、茉莉は言った。

いきなり言われたって、やっぱり理解できない。

夢見る少女の時代は終わったのだ。

「いきなり、理解しろっていうのも難しいわね……。まあ、異世界に移動したら、嫌でも理解できるかしら。あっ、そうそう、異世界に行くにあたり、能力が二つつけられるけど、どうする？」

（異世界・・・？なんだかよく分からないけど、普通に生きられる能力が欲しいな。植物と農業の神様とか言ってるから、とりあえず、畑でもつくってのんびりと自給自足しようかな。）

まだ、茉莉の脳は正常に起動しているわけではなかったが、このような結論に至った。

「じゃあ、自分の思い描いた植物の種を手のひらの上に創造する能力と、どんな植物でも栽培できる技術と力をくださいな。」

「その力なら、私たちで、何とかできるわ！ね？」

「そうだな。」

なんだか、神様たちはうれしそうだ。

「行きたい世界とかある？どんな世界に生きたい？」

なんだか、ルンルンと女の子が聞いてきた。

「えーっと、平和で安全で、文化的生活がおくれるところがいいです。」

戦争とか嫌だし、恐竜とかいたら困るしね。

「分かったわ！じゃあ、異世界で新たな人生を！」

「さよなら。」

そして、茉莉の意識はブラックアウトした。

1．ブラックアウト（後書き）

主人公の茉莉ちゃん、ぜんぜんしゃべっていない・・・

しかも、次話から主人公の名前が変わります。

2．異世界へ（前書き）

前の話で、途中で、神様がルンルンになったのは、自分たちでどうにかできる能力を希望されたからです。正直、できないことだったらどうしようかなと思ってました。

主人公の名前、まだ、茉莉さんのままでいきます。

2．異世界へ

最初に茉莉の意識が浮上したとき、周りにたくさん人がいた。
西洋人のように肌の色が白い。顔の彫りは、東洋人と比べて深い。
（西洋人よりは深くない。）
髪の色は、暗色から、無理やり脱色しないと出ないような薄い色まであった。

そして、その人々は、茉莉の目から見ると、異様に大きかった。
彼らが話している言葉に耳を済ませてみると……

「！＃＆‘（，（‘（＃（“」
「（‘％＆％＆＄“＃＄？」

何を言っているか分からなかった。

茉莉はさらに状況を読み取るため、体が動くかどうか確認してみた。
……動く。とりあえず、感覚はある。
でも、動かしやすいとは言い難い。

ベッドで寝ているようなので、転がるように体の向きを横にしてみる。
すると、茉莉の目線の先にはガラスがあり、その向こうには薄青の色の目の赤ちゃんがいた。その青でも水色でもない不思議な色合いの目がこちらをじっと見ていた。

茉莉は赤ちゃんに手を振ってみた。
同じように、赤ちゃんも手を振った。
茉莉は、赤ちゃんに向かってニコっと笑いかけてみた。
同じように、赤ちゃんもニコっと笑った。

いくらなんでも、この赤ちゃん、動きが良すぎないかなと茉莉はおもった。
反応時間が短すぎる。ほぼ同時に反応が返ってくる。
……まさか。あれは鏡に映った自分？
首が動かないので、手を持ち上げてみる。
そこには、ぷにぷにの赤ちゃんの手があった。
茉莉は赤ちゃんが自分だということに気がついた。
あの自称植物が神と言っていた、『異世界に転生させる』というのは、本当だったらしい。

2．異世界へ（後書き）

１１月２３日　改訂しました。

3．言語習得（前書き）

連続投稿いきます。

3．言語習得

乳幼児の言語習得の能力は、半端ないといっても大変なことには変わりがない。

茉莉は転生前の真っ白い空間は、自分の夢だと思っていた。ほしい能力について聞かれたときも、適当に言ってみただけだった。今更もう遅いが、言語理解能力をつけてもらえばよかったと思う茉莉だった。

言葉が分からないままでは人生の楽しさ半減するので、言語の習得に勤(いそ)しんだのだった

もし、「常に気難しい顔をしている赤ちゃん」だったら普通は変に見えるかもしれない。しかし、幸運にも、乳幼児には本能の部分が多く、特に理性があると都合の悪いときには勝手に意識が沈んでいった。もちろん、いいことばかりではなく、茉莉が気がついたら日が暮れていたということもよくあった。

最初、自分の世話をしている人が母親だと思っていたが、どうやら違うらしい。両親らしき人物は忙しく働いているため、使用人に自分の世話を任せているということは分かった。

まだ、転生して1年経っていないころ、突然家の中が騒がしくなった。言葉が分からないので、いまひとつ状況がつかめていないが、どうやら「引越し」をしたということは理解した。それ以来、両親らしき人の姿を見ることは無かった……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そうしているうちに、４年ほどの歳月が経過した。

今の自分は、光にかざすと金髪に変わる透明な茶色の髪でとてもふわふわしている。転生前は、真っ黒な直毛だった。瞳の色はさらに不思議な色合いで、青とも水色ともいえない薄青色である。

鏡で見る自分は、普通の４歳児と比べると冷めたような目をしている。まあ、これは仕方がないだろう。精神年齢が高いのだから。会社でバリバリ働いていた茉莉にとって、この状況は不本意である。せっかくそれなりの地位について自分の思うように仕事ができるようになってきたのに……と思わずにはいられない。

しかし、新しい人生というのも面白いかもしれないと無理やり思うことにした。まだ、試していないが転生が本当なら、『能力』も本当にあるのだろう。

元の世界に戻る方法を探すより、『能力』とやらを使って楽しく生きることにした。

まあ、すでに暗雲が立ち込めているが……。

４年のうちに、こちらの言葉はしっかり理解できるようになった。

そして、分かったことは、自分の名前がマリスで、両親がレストラ

ンの集団食中毒によってなくなっているということだった。そのため、孤児院にいる。
ちなみに、苗字は分からない。

マリスのこの世界について考えてみた。
こちらの世界でも、両親がいないのは悲しいと思ったが、その分、孤児院の職員さんはとても優しかった。
生活水準としては、大量生産の概念があり産業革命時代に相当している。それにしては、孤児院は、清潔で食事や衣服も足りていた。
これが、マリスのこの世界の印象だった。
この孤児院では、貴族が支援をしている。学費なども保障されている。貴族としては、屋敷で急に人手が必要になったとき、しっかり教育を受けた人間の供給源を確保しているのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ある日、マリスは『能力』について思い出した。これまでは精神的な余裕があまり無かったので、すっかり忘れていた。
まずは、『植物を手のひらの上に出してみる』をやってみた。右手をしっかり握り締め、頭の中には、おいしそうな炊き立てご飯を思い浮かべながら……。
マリスが手を広げてみると、籾（もみ）つきのコメがちょこんと一粒のっていた。
成功したと思った瞬間、めまいをおこして倒れてしまった。

その日、マリスが目覚めることはなかった。

3．言語習得（後書き）

さて、マリスに何が起こったのか！？
次話、乞うご期待！

（次からは、主人公の名前は完全に『マリス』だけになります。）

１１月２３日　改訂しました。

4．目覚め（前書き）

とりあえず、つくれるときにつくろうかな。

4．目覚め

マリスの意識が戻ったのは、2日後だった。
その間、高熱でうなされていたらしい。『能力』を使ったことによる反動で、体力が大幅に少なくなったことが原因のようだ。

（この能力、リスクが大きすぎるわ……。でも、ご飯食べたい。こっちの主食は、麦の粒が見えたパンなんだもん。たまには、ご飯食べたい。手のひらにいっぱいないとダメだよね。ああ、けどまた寝込むのか。あっ、でも体力を消費するんだから、体力つけて何度か練習すればできるよね。そして、ご飯たべよう。体力作るにはどうしよう。走るっていっても、孤児院のお庭は小さいしね。そうだ！！！）

悶々とマリスはご飯について考える。そして、何かひらめいたようだ。

体が全快したあと、農作業や掃除を手伝うマリスがいた。

マリスはまだ4歳のため、本格的な役割分担はされていない。通常は6～7歳から、4～6人からなるグループに所属し、役割をこなすことになる。しかし、マリスは体力をつけるため「手伝い」をすることを考えたのだった。

どうやら食には人を動かす力があるようだ。

４．目覚め（後書き）

この孤児院はクリスチャール孤児院といいます。（作者が忘れてしまうので、書いておきます。）
この国の子供の人権を憂えたクリスチャール侯爵が作りました。

１１月２３日　改訂しました。

5．能力発揮（前書き）

やっっと能力が利用されます。

5．能力発揮

ブロント・エレルッサ・ヴェ＝クリスチャール（クリスチャール侯爵）が、子ども、特に孤児の生活環境と識字率の低さを解消するために孤児院をつくった。当時の孤児院では、職員による補助金の横領や、体罰や虐待、最悪は人身売買が行われていた。それらが一切できないように、クリスチャール侯爵自身が院長となり良識ある人間を職員として雇い、運営を行った。その結果、クリスチャール孤児院では、孤児の生活環境が良くなった。そして、学費も出されたことから、優秀な人間が多く排出されることになり、このような優秀な人間は、孤児院の運営や、侯爵家・国家の支えとなった。

現在では、クリスチャール孤児院を支援する者や、新たに良い孤児院が増えているが、孤児院ができた当初は経済状況が少し苦しかった。そこで、学費にお金をかけるために、できる限り自給自足していこうということになった。

今でも、クリスチャール孤児院には菜園があり、必要最低限の野菜が作られている。掃除などの家事や農作業は当番制である。5人で1グループがつくられ、6～7歳になると各グループに入れられることになっている。農作業は、平日は水遣りのみで、休日に畑を耕したり肥料をまいたりしている。

このような経緯で、院の経営を助けるための勤労は奨励されている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

太陽が照りつける中、マリスは大きな麦藁帽子をかぶり、シャベル

で作物を根ごと収穫している。
シャベルの大きさは、はっきり言ってマリスの身体にあっていない。しかし、それが苦になっていない様子で、自分の背丈ほどもあるシャベルで黙々と農作業をしている。

「マリスはよくはたらくなぁ～」
大人でも根気のいる作業を黙々と続けるマリスに、グループリーダーのディールは感心していた。

現在、マリスはディークのグループに所属している。
通常、グループに入るのは6～7歳からになる。しかし、ちょこまかと他の人の手伝いをしているマリスを院長が目撃し、急遽グループに入れられることになった。小さな子どもに一人で動き回られるより、グループの監督の下のほうが、安全だと判断したからだ。

今、マリスが収穫している作物は、乾燥させた根をすりつぶしお湯で溶かすと暖かい飲み物になる。しかし、この根は土にしっかりと定着しているので、収穫するのはとても力が要り重労働である。
もちろん、小さな子どもができる作業ではない。

マリスの場合は『どんな植物でも栽培できる技術と力』という能力の『力』によって可能としている。つまり、植物を栽培するための腕力などが能力によって付加されているためである。しかし、この『力』は、農作業以外では発揮されない。普段は非力な子どもである。
農作業のとき、いきなり怪力を出すと不自然なので、マリスとしては、少しずつ…少しずつ……能力を発揮していったつもりだったが

……やはり、不自然なものは不自然である。

それでも、ディールもグループのメンバーも何も言わないのは、もう見慣れてしまって景色同然になっているからである。

「「「だって、マリスだから」」」

この一言ですべてが片付けられてしまうのだ。

5．能力発揮（後書き）

最初に、マリスがいる孤児院の成り立ちをのせました。

１１月２３日　改訂しました。

6．収穫とメンバー（前書き）

なんとか本日中

であります。

6．収穫とメンバー

自分は冷めた性格をしているので、たまには、子どもらしいことをしなければとマリスは常々思っている。
変な歌を歌うのもその一環だったりする。……多少恥ずかしくても。

「ピーマン♪トウガラシ♪カッラッカラ～」
「あらマリス、楽しそうな歌ね。」
微妙なリズムで変な歌を歌いながら、マリスは副リーダーのミーザと共に、ルーサの実を収穫していた。

ルーサは、見た目はピーマンそっくりだが、緑色の部分は食べられない。食べられるのは、種の方である。

種はひと月干すと、トウガラシとコショウを足して2で割ったようなスパイスになるのだ。
ちなみに実の部分は食用にはならない。種と同じように乾燥させると、木の皮のように硬くなる。他の植物の苗の根元に敷き詰めると、保温効果が得られる便利な植物である。

茎はとても硬く、専用のはさみで切ル必要がある。しかし、このはさみは威力があるため、収穫するときには、きれいに葉をかき分けないと必要な茎まで切ってしまう。ある程度経験がないと切れないが、マリスは簡単そうに切っていく。……もちろん『能力』によって。

『どんな植物でも栽培できる技術と力』……体が勝手に動くわけではなく、微妙なコツがつかめている状態である。言葉では表現できないけれど、なんとなく分かる。というレベルである。

ちなみに、『力』の方は、使いすぎると弊害が起こる。
———まだ、マリスには筋力がついているわけではないので、筋肉が負荷に耐え切れず筋肉痛を起こしてしまう。

どちらにせよ、最強な能力にはなりえない。悲しいことに。

閑話休題、４歳児がはさみを一人で扱うのは危険なので、副リーダーのミーザがついているわけである。ミーザは、薄い赤褐色の波打つロングヘアーを後ろで束ねた、１７歳の笑顔が素敵なやさしいお姉さんである。グループ内では最年長である。

実は、グループで、２番目に年長者はリーダーを、１番の年長者が副リーダーを勤めることになっている。将来の進路を考える時間をより多く取るために、１番の年長者は補佐という形になる。ちなみに、ミーザは将来、孤児院の職員になるつもりである。

マリスとミーザによって、収穫されたルーサはリーダーのディークによって運ばれる。
運ばれた、ルーサはオネエな口調のカルドーラ（通称カル・カル姉）と暗褐色のソバージュヘアーのピッサによって、半分に切られ、網の上にのせて干されていく。カルドーラはオカマというわけではない。ただ、ガサツをきらい女性らしくなっただけである。そのため、このような細かい作業に適しているといえる。

ピッサも姉御肌で、カルドーラのこだわりすぎによる暴走（？）をしっかり食い止めている。

とてもすばらしい連係プレーにより、予定より早く、収穫は完了した。

6．収穫とメンバー（後書き）

１１月２３日　改訂しました。

7．準貴族（前書き）

いきなり、３年の月日が飛びます。
（この３年間のことは、いつか番外編でもつくろうと思っています。）

7. 準貴族

孤児院で生活して、さらに3年の月日が経った。マリスは7歳になった。ミーザは2年前に孤児院から卒業し、今は、違う孤児院の職員になっている。そして、3年前リーダーで、今は副リーダーのディークが孤児院を出るときがやって来た。それと、同時にディークは通っていた学院も卒業する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

マリスやディークをはじめ、孤児院の子どもには姓がない。そのため、今までは共通して、学校などでは、子どもたちはエレルッサ（初代院長クリスチャール侯爵のセカンドネーム）の姓を名乗っている。

これには、大きな理由がある。

孤児院を出て、学業を修め立派になった若者たちを利用しようとする輩が現れた。

自称母親、自称父親、自称親戚などである。実際に血のつながりがあったとしても、孤児院に預けておいて、都合の良い時だけ出てくる連中がいた。あるいは、親と思われる人間の負債や責任を背負わされる若者もいた。

この事態をうけて、孤児院に入った子どもには、親や親戚は一切の権利の主張をできなくした。苗字を一時的になくすのはその一環である。孤児院から出るとき、院長から新しい苗字がもらえることになっている。

通常なら、ディークも院長に苗字をもらうのだが……彼には、貴族の後見がつくことになった。

貴族の後見がつくと、準貴族になる。準貴族とは貴族の姓が名乗ることができ、その貴族の支援を受けることができる。反対に、被後見者が功績を残せば、その貴族の名声は飛躍する。学院で優秀な成績を修めたものには、後見につきたい貴族が殺到するのである。

ディークは、オランジュ家からの後見がついた。
オランジュ家の当主から、新しいセカンドネームも贈られた。（セカンドネームは、準貴族以上の証である）

ディークは、ディーク・フレデリック・オランジュという名前になり孤児院から卒業していった。

ちなみに、後見が着いた理由は、学院で行った『小さい力で、大きなものを動かす』という研究が評価されたからである。彼が、この題材に着目した原因は、マリスである。小さなマリスが大きなものを動かしているのを見て、自分なりの解釈をまとめたものだったりする。

ディークが孤児院を出た次の日、マリスは突然院長室に呼ばれた。
院長室のソファーには、初老の女性が、品良く座っていた。

7．準貴族（後書き）

このおばあさん、いったい何者！？

１１月２３日　改訂しました。

8．おばあさん

この国のほとんどの産業は、建国当初は貴族主体で発展した。
その名残が今も残り、多くの産業の元締めが貴族だったりする。
例えば、貿易業の港の管理がある特定の苗字の人物が並んでいる。
これは、元の貴族以外にも、貴族の後見がついた元庶民の準貴族達がいるからである。

農業も例外ではない。

現在、作物の流通に関して大きなシェアを占めているのはヴェルトシュタイン家である。生産地から、特殊ルートで農産物は運ばれていくのだ。この貴族が作物の値段を決めているといっても過言ではない。

今となっては男爵家とはいっても堅固な地位を築いているヴェルトシュタイン家だが、元々は準貴族だった。

準貴族と純粋な貴族との大きな違いは、発言力と世襲にある。
準貴族は、本人に後見がついただけであり一代限りの貴族である。
本人の子どもは成人をすると、元の姓の戻らなければならない。
しかし、純粋な貴族は世襲ができる。世襲ができる分だけ、発言力も増すのである。

後に初代当主となる、準貴族の「アルツ・ファイナ・シュタイン」は作物を効率よく流通させることに尽力した功績により、後見だったシュタイン家から独立し「ヴェルトシュタイン男爵」となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「マリス、こちらはシュタイン子爵です。」
院長がソファーに座った初老の女性を、そう紹介した。

その女性は、マリスから見て、「おばあさん」という年だった。
髪の毛のほとんどは白髪だが、背筋はピンと伸びている。貴族とはいっても、身に着けているのもは派手ではなく気品があった。

「こんにちは、マリスです。」
「こんにちは、私は、イピサ・オリビア・ヴィ＝シュタインです。マリスさん……あなた、私の家の養子にならないかしら？」

養子の場合、後見とは異なる。
完全にその家に入ることになるのだ。

「少し早くはないですか？マリスはまだ、７歳です。」
院長は、子爵の回答をマリスにも聞かせるために聞いた。

「それは、この子が農業に興味を持っていることを聞いたからです。私ももう年です。後継者が欲しいところですが、なかなか優秀な人

材がいませんの。それなら、小さいうちから教えていけばいいと思いましてね。」

（貴族かー。堅苦しいのはやだな。でも……このおばあさんは好感が持てだし、シュタイン家といえば、品種改良で有名なところだしね。）

マリスの決断は簡単だった。

「どうしますか？マリス。」
「行きます私！」
マリスは、飛び上がって宣言した。

「よろしくね。マリス。」
「はい、よろしくお願いします。子爵。」
「いやね。おばあさんでいいのよ。」

ということで、マリスの孤児院ライフが終わった。

8．おばあさん（後書き）

第1章が終わりました。

11月12日、マリスの年齢を修正しました。

爵位を持っている人の姓の前には、爵位ごとに何かつきます。

公爵→ア○○（まだ未定）
侯爵→ヴェ
伯爵→セ○○（まだ未定）
子爵→ヴィ（本当は、「デ」になるでした。）
男爵→ウ○

例・イピサ・オリビア・ヴィ＝シュタイン

っていう感じです。

一応、規則性があります。
丸印をとって子爵部分は『デ』で読んでみると・・・

8．5　閑話　お別れパーティー（前書き）

閑話です。
マリス出番ないです。

8．5　閑話　お別れパーティー

マリスが孤児院を出るということで、急遽（きゅうきょ）お別れパーティーが開かれることになった。
お別れパーティーは通常の場合、学院の卒業シーズンに全体で一斉に行われる。しかし、この年のお別れパーティーは終わってしまったばかりだった。そのため、マリスのために小規模なパーティーを開くことになった。

参加できる人だけ、準備はマリスのグループの人でというパーティーである。

今のマリスのグループのメンバーは、リーダーはオネエなカルドラ（カル・カル姉）、ソバージュヘアーのスタイル抜群のピッサが副リーダー、そしてミーザが出た後新たに入ったリリアル（注：男性）がいる。

準備の間、マリスは他のグループへお別れの挨拶（という名のお手伝い）へ行っている。

「リリア～ン？そこのクッキーあなたのバカ力で砕いてくれないかしらぁ」
オネエの口調のカルドラが、ボウルでケーキの種を泡だて器でかき混ぜながら、近くで飾り付けをしていたリリアルにお願いした。
「リリアンじゃねぇ！リリアルだ！！！って、カル姉の方がバカ力だろっ」
そこは譲れないらしい。リリアンでもリリアルで正直どっちでもい

いと思う。

「いやぁね。私がそんなことできるわけないじゃない。」

「アンタも男だろっ」

「私は男も女も超えた存在になるのよ。気品が大切なのよ！気品！」

「男も超えるんだったら、楽勝だろ！」

クッキーを目の前にして、不毛な言い争いが続く。

そんな二人の目の前にこぶしが振り下ろされた。

ドガっ。ガゴツ・バキバキバキ

ピッサ（注：女性）の拳がクッキーに炸裂した。

袋に入っていた硬いロッククッキーが、すべて砕けた。

「簡単じゃないの。何やってるのよ。あんた達。時間ないのよ。さっさとやりなさいよ！」

ピッサの怒りも炸裂した。

「「ゴベンナサイ。」」

その後、あっという間にパーティーの準備は整った。

しかし、肝心の主役、マリスは他のグループからなかなか戻って

これなかった。手伝いに熱中しすぎてしまったのだ。
マリスは自分では、冷めた性格をしていると思い込んでいる。でも、実は一度熱中すると抜け出せない性格なのだ。

８．５　閑話　お別れパーティー（後書き）

ゴベンナサイは誤字じゃないです。

１１月２３日　改訂しました。

9．お屋敷

シュタイン家は建国当初からある由緒正しき貴族である。しかし、シュタイン家の先祖は大商人や良家ではなく、元々学者の家柄だった。

その中でも、人々の生活に有用な作物の研究に勤しんだのが、初代シュタイン子爵である。

現在のグレントリーズの主食は、芋のウーガだった。ウーガは、年2回収穫でき、どんな悪条件でも栽培できるという利点があった。でも欠点もあった。――長期間保存するためには、1ヶ月野外に干して乾燥させなければいけないのだ。しかも、生食の場合、採れたてでないと食べられたものではなかった。

グレントリーズ王国の建国時に戦乱が起こったとき、戦乱時には治安が悪化し外でウーガを干している余裕はなかった。敗走兵たちによる食糧の強奪と放火が予想された。この地域では、戦乱が起こるとウーガの乾燥ができず餓死者が多く出ていた。

しかし、今回の戦乱では、餓死者はほとんど出なかった。

戦乱による治安悪化の前に、シュタイン氏は保存性の良い植物を発見し栽培用に改良した。その作物は年1回しか収穫できないが、栄養価が高く保存性や味が良かった。グレントリーズ内では、その麦に似た作物『マギ』の栽培し、荒らされる前にすばやく収穫し備蓄することができた。そのおかげで、戦時中でも民衆は飢えることがなかった。

この功績によりシュタイン氏は、戦乱を治めた初代グレントリーズ国王から、子爵の地位と王都に隣接する領地を賜ったのである。

代々のシュタイン子爵家の人々は、広大な領地の中だけでなく、屋敷の中にも畑を作り、作物の研究をしていった。

その結果、この国の農業は他国とは比べ物にならないくらい発展していったのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

孤児院を出ることが決まってから、マリスには姓がついて名前が変わった。

マリスのフルネームは、『マリス・カトリーヌ・シュタイン』となった。

カトリーヌはあのおばあさんのシュタイン子爵がつけたものである。

これで、マリスは貴族の仲間入りをしたことになる。

孤児院を出る日の朝、マリスは引越しの準備をしていた。

引越しの準備と入っても、持ち物は数日分の衣類と思い出の品だけになる。

あとは、子爵家でそろえることになった。

マリスは少ない荷物を手に孤児院を出た。見送りは院長だけだった。

これは、孤児院の風習の一つであった。孤児院の門の外には、シュ

タイン家の馬車が停まっていた。

「マリス、達者でな。おまえは他の子より大人びているところがあるから、向こうでもうまくできるじゃろ。」

「今まで、ありがとうございます。」

マリスは、孤児院の院長に頭を下げた。

院長はうなずき、馬車から降りてきたシュタイン子爵に目を向けた。

「マリスをよろしく頼みます。」

「ええ。……では、マリス行きましょうか。」

「はい、これからよろしくお願いします。」

マリスは、院長にもう一度会釈してから、シュタイン子爵の後ろに続いて馬車に乗り込んだ。

孤児院は、王都内でも北側に位置している。王都はきれいな正方形で中心に王宮がある。王都を一周できる環状の道があり、その道のすぐ外側に王都の外壁がある。この道は、王都の主要な道になっている。

現在、マリスはこの環状道路を使って、王都東にあるシュタイン屋敷に移動している。

道には、信号がない。

道を横切りたいときは、地下道か高架を使うことになっている。

マリスは、孤児院の外に出ることが少なかったので、外の様子を興味津々で窓から眺めていた。シュタイン子爵は、マリスの様子を微笑ましく思っていた。

カラクリによって振動の少ない馬車が、古めかしいけれど立派な門の前で停まった。

「ここが……」

「そう、着いたわ。我が屋敷へようこそ。」

門は内側から使用人が開けるのかと思ったら……なんと、馬車の御者が降りて開けていた。

重厚な門だが、仕込まれたカラクリと御者の精神力が動力となり、簡単に開いた。

貴族にしては使用人が少ないのだろうか……とマリスは思った。

その後、マリスたちを乗せた馬車が再び動き始めた。

馬車の外には、屋敷の反対側に広大な土地が見えた。

（これが、かの有名な、『お屋敷の中の広大な畑』！！）

この畑で、コメ、ムギ、大豆の生産を夢見るマリス。最近、米粒一つぐらいなら、週1回出すことができるようになってきたので、茶碗1杯分のストックくらいならあるのだ。

しかし、よく見るとそこは畑ではなく……

広大な荒野だった。

9．お屋敷（後書き）

マイ畑への道が近づいたかと思ったら・・・という話でした。

１２／１２、やっと改稿いたしました。

倍近く増えたかも・・・

１０．経済状況把握（前書き）

お気に入り登録が１００件をこえました。

皆様、ありがとうございます。

１０．経済状況把握

シュタイン家の屋敷には、使用人が何人かいる。
執事→一人
門番（兼、馬車の御者、兼、馬の世話係）→一人
掃除兼食事係→一人（大掃除が必要な時期は臨時で人を雇う）
掃除兼洗濯係→一人
庭師兼警備→一人
５人で全員である。

ちなみに、シュタイン家は建国当初からある由緒正しき貴族のため、屋敷の敷地面積だけでなく、床面積も大きい。

掃除係のメイドさん（年配の女性たち）２人では、屋敷の掃除は行き届かない。２人で屋敷全体の掃除をするためには、１週間かかる。掃除の合間に食事作りや洗濯をするのだ。

門番は、普段は家畜の世話をしている。門の呼び鈴がなると、門へすっ飛んでいくのだ。
子爵が外へ行くときは、馬車の御者になる。

門番が、馬車の御者になっているときの門での訪問者の対応は、庭

師が行う。庭師は警備も兼ねている。草を刈るついでに、周辺を見ている程度だ。

ちなみに、こんな警備でも盗賊の被害にあわないのは、広大な荒地にある。荒地を見た瞬間、悪人たちは、屋敷に金銭が無いことを悟るのだ。
畑が荒野になっているのは、お金が無いからというより、耕す人間がいないからである。

執事のおじいさんは何をしているかというと、使用人の統括もあるが、大きな仕事は雑用である。
物品の調達や各種の手配をすべて執事1人が行っている。

屋敷の敷地内の畑が無くても、領民が耕している、領地からの税収によってシュタイン家は十分やっていけるはずだったが、約１０年前にヴェルトシュタイン家に農作物の流通を完全に抑えられてからは、作物の値段が著しく下がった。市井に出回る作物の値段が下がったわけではない。そのせいで、税収は一気に少なくなった。

そこから、若い人を中心に使用人たちが一気にやめていき、残っているのは古参のものたちだけになったのだ。
それからは、シュタイン子爵は、古参の使用人以外信用できなくなった。金銭は足りないわけではなかったが、収入が減ったこともあり、新たに使用人を募集することもしなくなったのである。

状況を知ったマリスは決意した。

「独自の流通経路をつくり、経済状況を立て直す！」

そして、コメを作る余裕をつくり、白いご飯を食べるのだ。

11．精神力

マリスが、シュタイン家に養子にやってきてから、すぐにドレスなどの衣類などがそろえられた。部屋の内装については、すでに準備が行われていたらしい。

2人のメイドさんによってあっという間に採寸が行われた。お針子さんに採寸から依頼すると高くなるらしい。

それから、マリスはシュタイン子爵と執事のセバスに連れられて、屋敷内見学に行くことになった。

掃除担当のメイドさんが2人しかいないのに、屋敷内は塵一つ無くきれいだった。

マリスの部屋、食堂、大広間、浴室、図書室などに案内された。図書室は生物、特に植物に関する蔵書が多く、王宮の図書室にも引けをとらない。

マリスは案内されていくにつれ、気がついた。

（誰かに用があるときは、どうしたらいいんだろう？）

大問題である。ただでさえ広い屋敷の中、目的の人物を捜し求めていては日が暮れてしまう。しかも、使用人が少ないため、誰かに遭遇する確率も低い……屋敷内で迷子になったらおしまいだ。

そして、聞こうとしたらもう一つ問題が発生した。

（なんて、呼べばいいんだろう・・・子爵とは、もう呼べないし。）

シュタイン子爵の呼称である。

マリスは、子爵家の人間になったので、もう『シュタイン子爵』と呼んでは、よそよそしすぎる。

「イピサ様、誰かを探すときはどうしたらよいでしょうか？」

苦肉の策で、使用人たちが、子爵のことを『イピサ様』と呼んでいるので、そうしたのだ。

「呼び方は、『おばあ様』でいいですよ、マリス。誰かを呼ぶときや伝えたいことがあるときは、部屋の隅にある、『呼びかけ鈴』を使いなさい。」

子爵はマリスの苦肉の策を察してくれたらしい。

マリスは、このとき『呼びかけ鈴』の存在を知らなかった。

「呼びかけ鈴は、どの部屋にも、隅のどこかにあるわ。呼びかけたい屋敷の区域のボタンを押して選択してから、台の中央部分に手の

ひらを置いて精神力を流し込むの。そうしてから、マイクで伝えたいことを話すと、声が選択した区域だけに増幅されて届くわ。」

「精神力はどれくらい流しますか。」

「気持ち程度で十分よ。もし、精神力の使いすぎで枯渇してたら、隣の呼び鈴を鳴らすのよ。」

「わかりました。」

（この世界にしては、なんと便利な！放送みたいね。）

便利だと思ったが、実はマリスは精神力の扱いが苦手である。不得意というわけではない。

体の中の精神力の流れを読み取らないと、精神力は使えない。

気功の気の流れを読むようなものである。

流れを読むことは簡単にできたが、精神力を流し込むときの、『ぞわっ』という感覚がマリスにとっては、気持ち悪い。これは、人によって個人差があるらしい。精神力が使えないと、この世界ではやっていけない。

屋敷見学から部屋に戻ると、すでに2～3着の屋敷内用のドレスができていた。

（どれくらい、お針子さんたちを急かしたんですか！？）

マリスがおもわずつっこみを入れるくらい、メイドさんと依頼したお針子さんたちは優秀だった。

１１．精神力（後書き）

執事のセバスの名前ですが、
「執事といえば、セバスチャン。でも、安直すぎるから『セバスチョン』にしよう！」
と思ったんですが、さすがにやめました。

この世界には、ミシンがあります。
精神力を流し込みながら使います。ミシンを長時間稼動させるためには、それだけ精神力を使用します。

稀に枯渇しますが、一晩寝ると、ある程度回復します。

１２．変な虫

マリスがシュタイン家にやってきてから、２０日が経過した。

これまでで、マリスが分かったことは挙げてみる。

・イピサ（シュタイン子爵）の外見は、ハ〇ジのロッテンマイ〇ーさんの年齢を上げた感じだが、中身はかなりやさしい人物であること。

・執事のセバスのフルネームが『セバス・クルスチャン』であること。（真ん中のクルスを抜くと、セバスチャンになる。）

・執事のセバスは、神出鬼没であること。（いつのまにか出現している。）

・２人のメイドさんは双子であること。（二人とも結婚暦はあるが、不幸にも夫が死去している。そのため、以前はたらいていた子爵家でもう一度再就職している。）

・色黒で引き締まった肉体をもつ門番（兼馬車の御者）のジョンソンは現在、３５歳で、子爵家には２０年くらい前から仕えている。

・子爵家の使用人たちは、一癖もふた癖もある人物だが、マリスには異様にやさしい。

・屋敷の畑は現在荒地だが、生活に困っているわけではない。（ただ、時間がないだけ。）

情報の習得や分析は、時に大きく状況を左右する。
そのため、マリスは前世のときから、気づいたことをすぐに何かに書き込むことにしていた。

今も、分かったことを日記に日本語で書いている。これが、とてもいい暗号になるのだ。

でも、明日から、日記をゆっくりつけている時間は取れないかもしれない。

……家庭教師が来るのだ。

通常7～8歳になると、初等院に通うことになる。いわゆる小学校である。

初等院が5年あり、その後中等院が2年、高等院が3年、そして研究科が1年以上ある。
初等院から高等院までを一般的に『学院』とよぶ。

初等院と中等院には、国から助成金がでているため、誰でも通うこ

とができるし、通う義務もない。そのため、貴族は、屋敷に家庭教師を呼ぶ場合も多い。

しかし、中等院卒業または中等院認定試験に合格しなければ、高等院に進学できないし、まともな職業につくこともできない。中等院卒業レベルは、最低限の教養なのだ。

このような理由から、一般庶民は学院に通う。そして、初等院から通う貴族も多い。中等院卒業には試験はないからだ。

だから、マリスはイピサに聞いてみた。

「おばあさま、私は初等院に通わなくていいのでしょうか？」

「あなたには、しっかりと知識を身につけてもらうために、家庭教師を呼びます。初等院に通っている暇はありませんよ。」

実は、孤児院の仲間たちから、初等院の楽しさを聞いていたので、期待していたのだ。

初等院では、読み書き・計算などを中心としている。毎日午前中で終わるのだ。

貴族の家に呼ばれるほどの家庭教師は、研究科に所属したことのある人間であることが多い。研究科は、文字通り研究者のためのものである。所属する年数は自分で決めることができる。しかし、国で

も一握りの人間しか入れない。

そんな人を雇うのは、金銭に余裕があっても経済的によくないのではないか……とマリスは思った。

そこで、マリスはたまたま見かけた庭師（兼警備員）のおじいさんに聞いてみた。

「どうして、すごく、お金がかかるのに家庭教師なのかしら？私は初等院でいいのにな。」

あくまで、無邪気な子どもを装ってみた。

体は子ども、頭脳は大人というのは、結構大変である。

「そりゃぁ、かわいいお嬢さんに悪…じゃなくて、変な虫がつかないようにしてるんじゃないですか。」

「変な虫ってなぁに？」

「つくとやっかいなもんです。」

「そうなの。」

貴族もいろいろ大変なんだなとマリスは思った。

１２．変な虫（後書き）

変な虫は、悪い虫のことです。
はっきりいって心配しすぎですね。

今日気がつきました。
マリスって、コナンみたいに、体はこども、頭脳は大人なんだなって。

１３．単子葉類（前書き）

ユニークアクセス１万こえました。
ありがとうございます。

御礼企画として、番外編を考え中です。

13．単子葉類

本日、シュタイン家に来るはずだった家庭教師の先生は手違いで来れなくなったらしい。

家庭教師には、オランジュ家の準貴族の方が来るという話しをきいて、マリスは期待していた。

――孤児院でお兄さん的存在だった、ディークがオランジュ家の準貴族だからだ。

マリスの精神年齢は高いが、右も左も分からない異世界では子ども同然だった。ディークはそんなマリスにいろいろと教えてくれた人の一人である。

そのため、ディークに対するマリスの好感度はとても高い……恋愛感情はないが。

オランジュ家は、生活に欠かせないカラクリ作成の一族である。カラクリ作成の貴族は多くいるが、その中でもオランジュ家はカラクリの動力――基礎の部分を開発している。

斬新なカラクリの作成のために、多くの科学者の後見となり、準貴族にしているのである。

シュタイン家にやってくるのは、その準貴族の中でも年配の人らしい。ディークではないことを知って少しがっかりしたマリスだった。

今日は、家庭教師が来ないので、一番暇そうな（↑マリスの客観的意見である）庭師兼警備員のおじいさんにシュタイン家の簡単な歴史について、聞くということになった。

そのなかで、衝撃的なことがあった。

この世界では、

「単子葉類は雑草に分類される」

ということだった。

昔、初代シュタイン子爵が子爵に叙された原因となる作物があった。双子葉類と単子葉類の中間の作物（葉の形は単子葉類の植物に良く見られるようにとても細長いが、葉脈は双子葉類の特徴である網状脈をもっている）が、食用にできることを発見し、品種改良したのだ。

その植物は、実の部分は、前の世界の穀物のムギそっくりで、保存がとてもきいた。

それまで、この世界の主食は芋の仲間のウーガだった。年2回とれて、どこでも栽培できる作物だった。

でも、採れ立てをすぐにたべないとまずい。

食べれないことは無いが、好き好んで食べるものではなかった。

それに、徹底的に乾燥させないと、保存が難しかった。

建国時の戦時中は、のんびり乾燥させている暇がなかった。

それに引き換え、ムギそっくりの作物、『マギ』は保存が容易で、加工がしやすくおいしかった。年1回しかとれなくても皆、マギに

とびついた。

乾パンのような加工されて、軍用の保存食にも使われた。その軍用食が改良されて、今のパンもどきになった。

……本日の講義のマリスの感想は

『稲を雑草と間違えられて、抜かれたらどうしよう！？』

だった。

１３．単子葉類（後書き）

明日も短いながら更新します。

１４．夢見る少女

初講義を終え、ふわふわのベッドにぐっすり寝ているマリスは久しぶりに夢をみた。

雪よりまっしろい空間にマリスはいた。

『こっんばんはー！　ウキャー！！！！！！！！！！！』

どってんガラガラ・・・

なぜか、自称『植物の神』と『農業の神』も一緒にいた。

植物の神となのっていた少女は、再び奇天烈な出現を目指して失敗したらしい。

横からスライディングし、バック転……をしようとしてポーズが決

められずそのまま転がっていった。転がるときに、『ガラガラ』という音がするのはなぜだろう。

少女が痛みで悶絶している間に、自称『農業の神』がマリスに尋ねた。

『能力は試したか？』

『あんまりつかえないね。』

『リミットを自分がかけた。過ぎる力は毒になる。』

……そうですか。

『植物を創り出すちかだっ……ごふっっ『私の役まで取らないでよお！！！』

横から、とび蹴りされて、農業の神は吹っ飛んだ。

『じゃあ、説明いくねv　まず、創り出せる植物は、その世界にあるものだけね。地球にあっても、この世界に無いものはつくれないよ。近似の種くらいはないと無理ね。だから、今まで、創れた植物はその世界にあるってことね。』

というとは、コメはこの世界にあるということになる。

『というわけで、神様の助言プレゼントでした。じゃあ、私たちは、1ミリもこれから助けてあげないけど、頑張ってね☆』

『何か能力以外で、助けてくれてたの？』

『まったく助けてないよん★』

そんなことだと思ったマリスだった。

１４．夢見る少女（後書き）

神様たちのキャラが壊れてますね。

１５．少数精鋭（前書き）

マリスの大まかな一日の生活です。

15．少数精鋭

基礎的な勉強は、オランジュ家からやってきた家庭教師に教わっていた。

計算の類は、単位が違うだけで、とても簡単だった。

しかし、問題は国語だった。

『読み』は問題ない。必死で、言語習得した甲斐があって完璧だ。

『書き』も一応かける。

でも、『かける』と『完璧』は違うのだ。

はっきり言って、悪筆なのだ。

子どもの落書きレベルだ。

マリスはまだ、きちんと修学していないので、これは仕方がない。

マリスは、自分の耳と言語習得する際に孤児院のほかの子たちのノートや、孤児院に会った本を使って言葉を覚えた。

特に、本の字は小さいので、書く練習をするときには、他の子のノートが参考になった。参考にした字は美しくなかった。

一般庶民の場合は、それでも良かったのだ。

でも、今マリスは貴族になった。貴族が悪筆では、いけないというわけではないが、特にシュタイン家は商談などで字を書くことが多いので、気をつけなければいけないのだ。

そんため、目下練習中である。

昼は昼食をしながら、テーブルマナーを覚える。

講師は、シュタイン子爵である。

元々、マリスは前の世界で会社の接待用に、テーブルマナーを習っていたので、そんなにも難しくは無かった。ただ、少し形式が違うだけだ。

午後から、3時のティータイムまで午前中の家庭教師の先生に習ったことの復習をする。

3時からは、マリスの自由時間だ。

自由時間をつかって、簡単なこの世界での作物の知識を、庭師兼警備員のおじいさんに習っているところだ。

この『おじいさん』は屋敷で一番暇そうだ。
執事のセバスは絶えず移動しているし、メイドの2人は一日中掃除をしている。
門番兼家畜の世話をしているジョンソンは、門番としての仕事や馬車の御者をしている合間に馬の世話をしている。

庭で、のほほんと雑草を抜いている姿しか見ない。

そして、実は、マリスは『おじいさん』の名前をしらない。
名前を聞いたら、『爺でいいですぞ』とはぐらかされた。きっと何かあるのだろう。

いつもどおり、庭でおじいさんとこの世界の花を種類ごとにテーブルに並べていた。
穏やかな午後のひと時が今日も過ぎる。

そこへ、不審者が現れた。
真っ黒い上下で、身長１８０ｃｍ、頭部には黒い頭巾をかぶっている。忍者のような出で立ちだ。昼間にそんな服装をしていたら、逆に目立つだろうに……とマリスは思った。

「命がおしければ、手を挙げろ！」
どうやら、身代金目的でマリスを誘拐に来たらしい。（こんな昼間

に）
しかし、使用人がいたため、脅して金を取ろうとおもったのだろうか。

黒ずくめが一人しかいないのは、警備が薄いという噂のためだろう。

おじいさんを見て、刃物で脅そうとする不審者に対し……

「ぺいっ」

と素手でおじいさんは不審者を門の外に放り出した。（門からかなり距離がある。）

それでも懲りずに立ち向かう不審者に今度は、鳩尾に鍬の柄を叩き込む。
しかも、わざと急所をはずしたらしく、気絶できないようにしている。おじいさんはＳのようだ。

不審者は、うずくまりながらも、意地で片手間で自分をあしらった相手の顔を見た。

「お前は、まさか！あの、武道の達人で放浪の狼！『エルジィ・アンタレス』だと！！！」

マリスには、よく分からなかったが、『おじいさん』がすごい人物だということが分かった。

『おじいさん』も屋敷の少数精鋭の一人だということが分かっていただけただろうか。

１５．少数精鋭（後書き）

なかなか話が進みませんね。

実は、風邪気味です。喉を痛め、鼻づまりがひどいです。どうやら、今風邪がはやっているようですね。皆様もお気をつけてくださいませ。

話は変わりますが、御礼企画でとりあえずシリーズで『最強を目指したその結果』というものを掲載しました。

この『畑』と比べると、ちょっと重いです。数話で完結すると思います。

本当の『最強』とは何なのか……というテーマであります。

頑張ってそちらも更新します。

１５．５閑話　孤児院での一日（前書き）

前話で、一日の過ごし方をやったので、今度は、孤児院での過ごし方（というより日程）をつくりました。

１５．５閑話　孤児院での一日

６時：起床。６時になったらすぐに布団を片付ける。（年長者には、ベッドが支給されているが、就学前の子どもは大部屋に布団を敷いて寝ている。）

６時３０分：朝食準備。当番のグループは速やかに準備を始める。それ以外のところは、まだ寝ている人を起こす、体調の確認をする。体調不良者がいたら、夜勤の職員に知らせる。

７時：朝食。一斉にいただきます。お残しは許しません。

７時半：片付け。皆で片付けた後、当番のグループが一気に洗う。一気に洗っても、皿が樹脂製なので割れない。当番以外のところから順次歯磨きをする。

８時：学院に通う子は出かける。夜勤の職員さんは帰宅する。普通の職員さんたちが出勤。

８時から～１２時：就学前の子どもたちは基本的に暇。絵本を読んだり、遊んだりしている。

１２時：初等院にいっていた子たちが帰ってくる。昼食の準備を始める。

１２時３０分：いただきます。

１３時～１５時：初等院の子たちは、宿題や復習をする。終わったら遊ぶ。小さな子どもは昼ね。

１５時：中等院から上の子たちが帰ってくる。

１６時～１７時：農作業、掃除等の分担作業、明日の食材の準備もこの時間に行う。

１７時：夕食準備

１７時３０分：夕食の時間。

１８時：片付け。ここも当番制。当番以外は、自分の食器を片付けたら、歯磨き。

１８時半：年少者から入浴。（早く寝るため。）　浴槽は男湯と女湯があり、大浴場なので一気に入れる。

１９時：就寝準備。冬は、敷き布団の下に、水を含むと発熱する『レイリ』という植物の果実部分（というより、ほとんど花床部分）をスライスしたものを敷き詰める。

２０時：ちびっ子就寝。夜勤の職員がやってくる。

２０時３０分～２１時３０分：年長者は勉強時間。火をつけると白く光る『シラハ』という植物の樹皮を燃やして明かりを取る。

２２時：就寝、消灯。

孤児院では、細かく時間が決められていたので、現在のマリスにとってシュタイン家はとてものんびりしたように感じます。

１５．５閑話　孤児院での一日（後書き）

作中にでてきた　『レイリ』という植物ですが、『十二国〇』の薪の代わりになる実からインスピレーションを受けてつくりました。（こんなのあったらいいなということで。）でも、子ども沢山いるところで燃やすのは危険なので、安全な設定を考えました。

冬に発芽するために、雨が降ると、花床が発熱します。その熱で新芽が保護されながら成長します。道端でも簡単に育ちます。という設定です。

１６．知識（前書き）

なかなか話が進みませんねぇ。

登場人物たちが引き止めるんですよ。困ったもんです。

１６．知識

マリスは、順調にこの世界の知識を身につけていった。

読み書き、行儀作法など貴族の作法も板についてきた。

また、新しい家庭教師によって、シュタイン家の人間として必要な植物の知識も手に入れた。それは、マリスがほしい知識でもあった。

この世界の植物を知らなければ、『白いごはん』に近づけないからだ。

でも、最近は、『白いごはん』抜きにこの生活を楽しんでいるマリスだった。

今日は、『おばあさん』のイピサと共に、シュタイン家の領地を見に行くところだ。

イピサは時には厳しいが、とてもやさしいおばあさんだ。

執事のセバスに見送られ、ジョンソンが手綱を握る馬車に乗った。

馬車に乗ること２０分。

領地の管理施設に、到着した。

そこで、マリスとイピサを出迎えたのは……

「セバス！？」

屋敷で、見送っていたはずのセバスがそこにいた。

「いえ、ちがいますよ。マリスお嬢様。私は、セバスの弟のリバスです。双子のように似ているので、皆様、最初間違えられるのです。」

まるで、双子というよりドッペルゲンガーと言ったほうがいいくらい、執事のセバスと管理長のリバスは良く似ていた。しかも、一卵性双生児というわけでもないらしい。

副管理長はリバスの妻のハリアが勤めている。ハリアは、笑顔の似合う気のいいおばあさんという印象の人である。農村で畑を耕しているのが似合うような、ふっくらした体型で朗らかな人だ。

ちなみに、執事のセバスには妻はいない。昔、ハリアをリバスと取り合ったとか取り合っていないとか……今となっては不明である。

今日は、視察という名目のイピサについて、畑の様子を見ている。領地一面に整列されて、作物が植えられている。

昔は、いい加減に、良い様に言えば「ダイナミック」に栽培されていた。

しかし、ヴェルトシュタインが作物を安くしか仕入れてくれなくなってからは、計画的に栽培しないと採算が取れなくなった。

また、利益を出すために、新しい農法の開発もする必要があった。

そのため、領地の経営を会社のようにし、優秀な人材を求めることにした。その結果、今ではヴェルトシュタインの仕入れに頼らなくても、独自の販売ルートで作物をさばけるようになった。

「マリス、この畑の維持には、時間と手間がかかっています。でも、畑が荒地になるのは一瞬です。あの屋敷の畑のように。これからも、一層、知識の習得はもちろんですが、植物を愛するということを忘れないようにしなさいね。」

畑のあぜ道を歩きながら、イピサは語った。

「はい、おばあさま」

マリスは、屋敷の畑に何か、秘密があるような気がしていた。

１６．知識（後書き）

第２章はもっとさくっと終わるはずだったんですが・・・なぜでしょう。

まだまだ続くようです。

おばあさんが思ったより寡黙なようで困ります。

17．白いごはん（前書き）

やっと念願の・・・

17．白いごはん

マリスが、シュタイン家の一員となってから、五年の月日が経ち、中等院に通うような年齢になった。

１０歳のときに、屋敷の畑の一部を与えられてから、いろいろな作物を少しずつ育ててきた。

それから3年、こっそり育てていたコメも食べられるレベルまで増やすことに成功した。

そして、ついにご飯の試食の日がやってきた。

マリスは、調理場に人がいないことを確認する。なんだか、コッソリしたい気分だからだ。

来年用の種籾はきちんと別に管理しておき、食べても良い分だけ、なべに入れて炊いていく。

（水は、それなりに入れて、最初強火で噴出したら中火、水が無くなってきたようだったら弱火にする。最後は火を消してしばらく置いておく……だったかな？）

うろ覚えであるが、うまくご飯を炊くことができた。

器にスプーンでよそって、一口食べてみる。

「おいしい！――でも、何か足りない。」

二口食べても、三口食べても原因は分からなかった。

そこへ、料理係のメイドさんが通りかかった。
こっそり、つくっていたマリスだったがなぜか、ごはんの試食を持ちかけた。

「まあ！ありがとうございますお嬢様。それでは、いただきます。」

マリスは、メイドさんが食べている姿を見て、なぜか満たされた気分になった。

足りないもの――それは、一緒に食べる人だったのだ。

「屋敷内にいる人に連絡します。ぜひ、調理場にきてください！」
マリスは、『呼びかけ鈴』（『１１話．精神力』参照）をつかって、屋敷全体の人にご飯の試食を呼びかけた。

その後、調理場には、イピサを初め使用人たちが全員集合し、ご飯の試食をした。

「なんだか、しっとりしておいしいですわ。」
「なべで煮るだけというのがいいですな。」
「新食感です。」

「来年からもう少し沢山つくりなさい。」

試食結果が好評だったので、マリスは、もう少し来年から大きな田んぼにすることにしたのだった。

17．白いごはん（後書き）

少し年数が飛びました。

ちょっと展開を進めていきます。

１８．中等院認定試験（前書き）

お気に入り登録２００人突破！
皆様、ありがとうございます。

これから、成長と陰謀の打破（予定）と恋愛（？）に向けて頑張っていきます。

１８．中等院認定試験

白いごはんがやっと食べることができてから、早２年。
屋敷内の敷地では、順調に稲作が行われている。

ちなみに、マリスは『アイガモ農法』でコメを作っている。

アイガモ農法とは、田植えをしたときに一緒に田んぼにアイガモを放す。
田んぼに生える雑草や、雑草の種子、害虫をアイガモが食べてくれるのだ。（定期的に、アイガモのえさをまく必要はある。）
アイガモは双子葉類の雑草は食べるが、稲は食べない。この性質を利用するのだ。
ただし、稲穂がつくころには、アイガモを田んぼから出さないと、稲穂が食べられてしまうが・・・。
問題点としては、アイガモのスペースを作るために、単位あたりの作付けが減ることだろうか・・・。しかし、農薬をまくよりもずっといい。

マリスは、アイガモに似た性質をもつ鳥を使って、コメを作っている。鳥も田んぼから出した後、出荷するのだ。

コメの栽培地域も、今まで湿りすぎて畑に適さないと思われていた湿地帯を中心に検討中だ。

このように、順調にコメは作れているが、まだ販売していない。新しい作物を販売する際には、認可が必要なのだ。この認可は技術な

どの特許申請に近い。ある程度、安定した収穫を見込めるようになってから、認可を申請するつもりだ。

申請するまでは、警備の関係上のことがあり屋敷の外では栽培できない。認可されてから、作物の場合２０年は特許があり、だれでも簡単に栽培できるわけではないからだ。誰かが、特許を出してしまったら、マリスはコメを作ることができなくなる。

屋敷の警備なら万全だ。実は、屋敷の外周の塀には一般的な木が植えられているが、その外周のもう一周内側には、毒の木『ラント』が植えられている。葉や枝、幹にとげがあり、棘に引っかかると、樹液が出される。その樹液が猛毒なのだ。

マリスが屋敷にやってきてすぐに、この植物『ラント』について教えられた。最初は庭を散策するにも、庭師兼警備員のエルジイがついてきたのはそのためだ。

今では、イピサによって樹液の生成方法と解毒剤の作り方も教えられ、うっかり引っかかってしまったときには、処置ができるようになっていた。

植物の要塞により、賊は敷地にすら入ることができない。

また、庭師兼警備員のエルジイは二つ名を『放浪の狼』または『武術の達人』といわれているほどの人物だ。万が一敷地内に入ることができても、エルジイが賊の気配を一瞬で察知し、排除するだろう。

下手な、銀行よりも安全だったりする。（この世界にも銀行は存在

する。）

マリスが、コメの販売特許を申請していないのには、他に理由がある。

中等院認定試験をまだ通過していないからだ。マリスは中等院認定試験を3ヵ月後に控えている。

中等院認定試験、通称『中等試験』に合格しないことには、特許の申請が出せないのだ。
もちろん、イピサの名前で出すことはできる。
でも、マリスの手で育てている作物だ。イピサとしては、マリスに申請を出させたいと思っている。

というわけで、マリスは現在必死に試験勉強している。

「マリスお嬢様、根つめすぎて大丈夫だろうか。」

「お嬢様のために、レモンティーを入れてもっていこうかしら。」

「じゃあ、私はスコーンを焼こうかしら。」

「わしでも、通るくらいじゃから、そんなに頑張らんでもいいのに。」

使用人たちは、試験結果よりもマリスの体調を心配していた。中東試験はそれほど難しい試験ではない。

しかし、その後に高等院に入学するための試験が控えているため、ついでに勉強をしているのだ。

――それから3ヵ月後。

マリスは無事、中等院認定試験を合格し、コメの特許の許可も出された。

１８．中等院認定試験（後書き）

一気にまた、２年飛びました。

どんどん、成長していきます。

アイガモちゃんですが、外の場合、犬とかから守らないといけません。（食べられちゃいますよ。）

１８．５閑話　マリスレポート：食生活改善計画（前書き）

ＰＶ１２万越え＆ユニークアクセスもいつのまにか２万越えいたしました。

いつも皆様ありがとうございます。

１８．５閑話　マリスレポート：食生活改善計画

ここで、グレントリーズ王国の一般的な食事を紹介しよう。

＜第１章終了時の食事＞

朝：

【主食】

ムギそっくりの穀物、マギの粒が見えた茶色いパン　ｏｒ　芋のなかまのウーガを粗く潰したもの

【汁物】

コンソメスープ（少し土臭い感じがする。）出汁のとりすぎて、しなびた野菜が入っている。

【メイン】

主に、動物性タンパク質

柴犬位の大きさのウサギのような動物の燻製もどき（をスライスしたもの）

（一般庶民は、主食と汁物でおしまい。）

【デザート】

果物

昼：
昼食は一般的には、軽い物しか取らない

【主食】
朝食のようなパンがスコーンになったもの
（一般庶民は、朝食の残り）

【メイン】
温野菜のサラダ

夕：
【主食】
やっぱりパン。
貧しい家庭では、ウーガのスープ。

【汁物】
マギの粒が入った野菜スープ。

【メイン】
いろいろな動物を使用した料理。
（沿岸部では魚もあり。）

【デザート】
果物

第1章終了時の食事のまとめ：
？全体的に、硬い。マギの粒が完全に細かくなっていないため、喉につっかえる。

？ウーガは現在非常食に近い扱いになっている。徹底的に乾燥させれば、2年くらいは保存がきく。
貧しい家庭では、3食ともウーガの料理となる。

？貴族の家庭ではデザートがあるが、果物を切るだけである。（スイートはない）

結論→現代っ子マリスにやさしくないメニュー

＜第2章終了時の食事＞

朝：

【主食】
マギのパン（粒は見えない。）　or　ウーガを混ぜ込んだパン（ちょっとまずいけど安価）

シュタイン家では、マギのパンに米粉を混ぜこんで、しっとりモチモチにしている。

【汁物】
コンソメスープ（土臭くない）
シュタイン家では、実験的に作られた作物が入っている。

【メイン】
第1章終了時と変わらず。

【デザート】
果物

やはり、一般庶民は主食と汁物で終了である。

昼：

【主食】
マギのパン

シュタイン家では、このパンに果物を混ぜ込んでいる。

【メイン】
温野菜のサラダ。

夕：

【主食】
やっぱりマギパン。

【汁物】
野菜スープ。裕福な家庭では、玄米の粒を入れている。

【メイン】
動物性タンパク質。
コメと同時に販売が認可された、コショウによって肉の臭みが良く消えるようになった。
第1章終了時とあまり変わっていない。

【デザート】
果物

現在食事まとめ：

？1章のときと比べ、全体的に食事の質が向上している。

？マギの粒を引いていたカラクリの向上により、完全にマギが粉になった。そのため、パンがふっくらおいしくなった。

？果物の種類のバリエーションが増えた。

？現在は、コメは高い食材だが、今後いろいろな料理に浸透していくであろう。

今後の課題：

？ハイ〇の白パンのような粉が精製されたパンが食べたい。
↓技術者と協力すべし。

？料理の種類が少なすぎる。

？スウィーツがほしい。

?コメの大量生産

?アイガモ農法で育てた、アイガモもどきの販売ルートの確保。（現在は安く買い叩かれているようなきがする。）

以上、第1回マリスレポートでした。

１８．５閑話　マリスレポート：食生活改善計画（後書き）

先日『最強』のほうも更新しました。

本当は、３章に行きたかったんです。

重いダンボールを抱えて階段を上っていたんです。
上り終えた後、ふらついて、右手（利き手）のひとさし指を壁の角にぶつけてしまいました。

指が壁のふち（木製）とダンボールのサンドイッチになりました。

ちょっと、へこんだけどだいじょーぶかなぁー
とかそのときは思ったんですが、昼から少し腫れてきました。

なので、現在湿布生活１００です。

触るとイタイ。

なのに、ウチのパソ子はこんなときに限って誤変換をしまくるんですよ。

というわけで、閑話をのせました。

１９．暗黙の了解（前書き）

なんだか、スランプって感じです。
まだ、２章の改稿が途中なんですが……出しました。

１９．暗黙の了解

時は、中等院認定試験の終了後にさかのぼる。

中等院認定試験は、あっけなく終わった。もっと、難しい問題が出るって話だったのに……とマリスは思った。試験内容は、新聞が読めるレベルの標準的な読み書き、それに常識的なこの国の地理と歴史、計算だけだった。

試験が終わった日の晩餐のときに、マリスはイピサに中等院認定試験についてたずねてみた。

「おばあさま、中等院認定試験は思ったより簡単でした。今年だけ簡単だったのでしょうか？」

イピサは、ふふっと笑って答えた。

「いえ、いつも簡単なのですよ。――　一生懸命勉強した人にとってはね。でも、油断したら『もしかしたら』失敗してしまうかもしれないでしょう。もう一回受けるという手もあるけど、将来に傷がつくわ。だから大人たちは皆、まだ試験を受けていない子どもに『中等院認定試験はとても難しい』といって脅すの。」

「もしかして、『中等院認定試験はとても難しい』と言って脅す事は、暗黙の了解になっているのですか？」

「そうなのよ。実は、この試験の合格率は９９．８％だそうよ。」

すっかりだまされたとマリスは思ったが、嫌な気はしなかった。

この中等院認定試験は国民が最低限の読み書きができるように作られたものである。この試験を通過しないことには、あらゆる保障や資格が得られないことになっている。試験は一度失敗した場合、次の年に受けなおすこともできる。しかし、めったに試験に落ちる人はいないため、『試験に落ちた』というレッテルをずっと貼られて

生きていくことになる。

「だから、中等院認定試験が簡単だと言うことは、まだ試験を受けていない人には言ってはいけませんよ。」

「はい、おばあさま。」

中等院試験に関する疑問点は解消されたが、まだイピサに聞きたいことは残っている。

マリスは、試験後の出来事を思い出していた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この試験は、不正を防ぐため、貴族・庶民関係なく指定された場所で行われる。試験が終わった後、同じ試験を受けに来た人たちの様子を見回してみた。

「……なんだか、簡単すぎない？……」

「……助かった。」

「ありえない。」

「だまされた。」

「よかった。」

拍子抜けだったのは、マリスだけだったわけではないようだ。

ふと、後ろを振り返ると、この国では珍しい漆黒の肩まである長い髪の少女がいた。マリスが周りの人と話していないのは、知り合いがいないのと１４歳の彼らの雰囲気についていけないからである。しかし、彼女の深い藍色の目は冷たい光を宿していて、周りを拒絶していた。

マリスは、なんとなく声をかけてみることにした。

「こんにちは、試験どうだった？」
「普通。」
「私の名前は、マリス・カトリーヌ・シュタイン。あなたの名前を聞いてもいいかしら？」
セカンドネームがある名前は、貴族あるいは準貴族の証だ。周囲で会話を聞いていた人が少しざわめく。しかし、彼女がこの後答えた名前に対して程では無かった。
「……ロゼ・オールディー・ローズ」
オールディー・ローズ……どこかで聞いたことのある名前だとマリスは思った。しかも、2つ目の名前であるセカンドネームは、自分と同じ準貴族以上の地位を持っている証でもある。マリスには、親しい同世代の友人、特に貴族の友人が少ない。屋敷の人間もいて、さびしくはないのだが、人脈を増やすためにもここで、「お知り合い」になっておこうと思った。
「ロゼって呼んで良いかな。」
「なんでもいい。……私のこと嫌じゃないの？」
「なぜ？今日あったばかりなのに。」
「……そうね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おばあさま、試験会場でロゼ・オールディー・ローズという子と知り合いになりました。ローズという名前をどこかで聞いたことがあった気がするのですが、思い出せません。」
「マリス、我が家はローズ家から除草剤や殺虫剤を仕入れているでしょう？」
……思い出した。

ローズ家といえば、薬の一族だ。他にも薬を生業とする一族はいるのだが、ローズ家は特に『毒薬』が有名である。成分の抽出に特に長けているといわれている。
建国当時、オールディー・ローズという老婆が『毒殺香』という香水を作り出し、多数の敵を倒したといわれている。目に見えない『香り』という兵器のため、敵味方関係なく恐れられたといわれている。現在でも、毒物に関係のない一般庶民には忌避されている。

マリスのシュタイン家にとっては殺虫剤や除草剤でお世話になっているところだ。

「あの良く効く除草剤や殺虫剤を作っているところですね。どうして、すぐに思い出せなかったのでしょう。」
「だれにでもあることですよ。マリスはもう少し貴族の名前を覚えた方がよさそうね。これから入る高等院には、貴族が多くいるから、覚えておかないといけませんよ。」
イピサは、少々心配だった。
マリスは、難関といわれる国立の高等院を受験予定だった。マリスの実力なら受かると信じている。問題は、人間関係だ。
マリスの交友関係は、とても狭い。一日のほとんどを屋敷内ですごしている。貴族としての気品とマナーは身に着けているが、自分が避けてきた貴族間の軋轢に慣れていないのだ。
イピサは、マリスに最低限の貴族間の家の交友関係は覚えさせる必要があると思った。

「はい、おばあさま。でもその前に高等院に受からないと。」
「そうですね。次は、国立高等院の一つのレアンデールの入学試験ですね。その前に、コメの特許申請を済ませておきなさい。実は、あまり知られていないことだけれど、特許や開発技術や研究がある と入学に有利になるといわれているの。」

マリスが入りたいと思っているのは、正式名『レヴィ＝レゾンディアール王立高等学院』通称『レアンデール』『技術院』と呼ばれているところである。
技術院という通称の通り、技術面を重視した学院である。イピサもここを卒業している。
「試験前に申請が間に合うでしょうか？」
「申請を出したという事実があれば、大丈夫ですよ。」

こうしてマリスは次の日、コメの特許申請を慌てて出しに行ったのだった。

１９．暗黙の了解（後書き）

試験があまりにもアッサリ終わった種明かしです。

それにしても、新キャラロゼちゃんがしゃべってくれません。

マリスも饒舌な方ではないので、会話に困りますね。

次回は、新たなキャラが出るかも！？

更新は年明けになりそうです。来年もよろしくお願いします。

では、皆様良いお年を。

20．常識問題

コメの特許申請は、これまたあっけなく通った。マリスは、申請が通るのはもっと大変だと思っていた。
なぜなら、『単子葉類はすべて雑草』と思われているこの国で認められるとは思わなかったのだ。
シュタイン家初代当主も、一応双子葉類の麦もどき『マギ』を食用として認められるのに苦労したようだ。この国の人から見たら、雑草のようだったのだ。

申請がすんなりとおったのは、シュタイン家の力が大きい。これから、人々の生活に浸透させるためには、マリスの一層の努力がかかせないだろう。

このように、世界が変われば食料も含め考え方も変わる。
前世の記憶があるということは、この世界よりも進んだ知識を生まれながらに有していることになる。
この世界の人々が発想し得なかったことを発想し、発展させていくことができるという利点がある。
反対に、マリスが前の世界の常識を無意識に引きずっているために起こりうる欠点もある。

今、現在マリスの目の前にあるレアンデールのテストがそれだ。

数学・生物・物理（ちょっと難しい）・言語はまだいい。
数学の知識は前の世界のものが使えるし、生物の中でも植物学はシュタイン家の十八番だ。物理は、カラクリの技術が進んでいるため難しいがなんとか解ける。言語はこの世界で生まれたときから必死

で頑張ってきた。

しかし、向こうの世界で『現代社会』『倫理』と呼ばれるものがかなりきつい。
前の世界の知識が邪魔をしてくる。

（ああー。なんでここでつまづくかな～。前の世界のセンター試験の現代社会は簡単だったのに。）

前の世界の知識を押さえつけ、必死でテスト勉強によって叩き込んだ知識を思い出す。

（もう、困ったときはコレね。カンしかないね。）

開き直りはとても早かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

試験の1．5ヵ月後・・・
結果発表の日がやってきた。

「おじょ～さまぁ～！」

いつもは、貴族の使用人らしく上品に振舞っている洗濯兼掃除担当のオメガがレアンデールからの封筒を抱えて走ってきた。
オメガに少し遅れて、料理兼掃除担当のオクトもマリスの部屋に到着した。かなり慌ててきたのか、手には食器の洗剤がまだ付着した状態である。

マリスは、封筒を手に取りペーパーナイフで封を切った。
オメガとオクトは、マリスの手にしている封筒を覗き込みたくて仕方なかったが、我慢してマリスの発言を待った。
……。
……。
マリスの表情が固まっている。
「あの、おじょうさま？」
オメガが我慢できなくて、声を発した。
「合格してたわ。びっくりした。」
双子のメイドは、一瞬息を止めて言われた言葉を反芻した後、満面の笑顔になった。
「「合格ですか！？おじょうさま」」
異口同音で、息がぴったり合っていた。これが双子マジックか。しかし、それからの行動が異なっていた。
「さあ、お嬢様。今日は、料理によりをかけてつくりますね。」
オクトは下がってきた袖を、洗剤のついた手でまくり上げ気合を入れた。
「いけない！知らせないと！」
といって、オメガはこの国の放送マイクのようなものである呼びかけ鈴に駆け寄った。

（嫌な予感がする。まさか、それで放送流すんじゃないよね？）

オメガはドカッと広げた手のひらを乗せ、放送範囲を屋敷全域（最大範囲で庭も畑も含む）に指定した。

「おじょうさまが、レアンデールに合格いたしました！！！

ン家の蔵書には、ここにしかないものがあるの。貴重な品だから、絶対他の人に貸してはダメよ。教授関係は絶対ダメよ。平気な顔で自分のものにしてしまうんだから。特に、『我の冒険記』の存在を狙っている輩がいるから気をつけなさい。」

「はい、おばあさま。絶対貸したりしません。」

見せられるはずがない。

『我の冒険記』は、初代シュタイン子爵の冒険記である。

ここに一部分を紹介しよう。

『・今日は、木の皮をむしってたべた。焼いてたべたらおいしかった。

・草原に入ったら、変な実がなってた。とげとげだったけどむしってたべた。からかったので、近くでとおりかかって人に食べてもらった。（無理やり）

（中略）

・変な単子葉類もどきを見つけた。そのままたべたら、まずかった。こなにして水でこねてから焼いたらおいしかった。たくさんつくっておいた。種子をとって、家で育てることにした。

（中略）

・歩いていたら、人がいっぱい居た。単子葉類もどきからつくったものを取り出してたべた。ウーガにくらべてまじでうまいよね。あーおいしいーっていってたら、身なりのいいひとがやってきた。ひとのぶんをたべちゃった。』

ちなみに、単子葉類もどきの話で出てくる、身なりのいい人とは当時戦っていた後の初代グレントリーズ国王である。

世間一般に知られている話は『ウーガのまずさと食糧の不足に苦しんでいた、後の初代国王の軍にやってきたシュタイン氏が無償で乾パンを配布した』という美談になっているが、この日記では異なっ

ている。

シュタイン氏は、戦乱が起こっているのに、マギの乾パンを袋にいっぱいつめてのんきに冒険していた。国王軍が空腹と戦っている前でマギの乾パンで優雅に昼食を食べていたら、乾パンを後の国王に袋ごととられた……というのが史実らしい。

王家にとってもシュタイン家にとっても知られたくない内容である。

たしかに、『我の冒険記』は重要な資料かもしれないがとてもじゃないが人には見せられない。

２０．常識問題（後書き）

次回、友人その２の出演を予定しています。

なるべく、間をあけないようにがんばります。

21．勧誘

マリスは、イピサに言われたとおりに貴族の系譜などに目を通し始めた。
各家の力関係や得意分野などを重点的に調べた。

貴族には、各家ごとに『管理義務』がある。管理義務とは、決められた分野においてその貴族が責任を持つということである。その分野の元締めである。
シュタイン家には、品種改良と王都用作物の栽培に管理義務がある。そのほかにも、ヴェルトシュタイン家の作物流通、オランジュ家のカラクリ（部品）、ローズ家の薬物（植物に限る）といった感じだ。カラクリの場合、細かく管理義務が分かれている。
貴族に任せられない分野や、貴族が管理している分野を束ねているのが、王都の役所である。

農業器具に管理義務を持つ貴族ももちろんいる。この国では早くから農作業にカラクリが取り入れられ、作業の軽減が図られている。畑を耕すトラクターから収穫のためのものまである。

マリスは、これから入るレアンデールでコメ栽培に必要な器具をつくってくれる技術者につなぎを取りたいのだ。

今までは、屋敷の畑でマリスが細々と続けていた稲作だが、特許を取った以上大々的に売り出したい。そのためには、農作業の機械化により効率を上げたいのである。

打算的な理由でマリスは、貴族の名前をついでに覚えていたのだが、

何しろ数が多すぎる。専門用語がありすぎて、マリスにはかなり難しかった。

貴族の名前を調べているうちに、かなり時間が経ってしまった。

（明日は、大事なレアンデールの入学式だからもう寝ないと・・・）

マリスは明日寮に持っていく荷物の中に、今読んでいた貴族録をしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

持ってきた荷物を新入生用のクロークに預け、マリスは入学式に臨んだ。

レアンデールには寮が３つあり、入る寮は入学式後に決まるため寮に荷物を預けることはできない。

どの寮に入るかは希望制だが、定員オーバーの場合は試験のときの成績順である。

一番人気は、共通棟（必須分野を行う教室）と正門が近いアーノル寮

２番人気は、同じく共通棟と専門棟が近いベーゼ寮

一番人気が無いのが、専門棟と研究棟には近いシィーラ寮である。

１年目はほとんど皆同じ科目をとり、その講義は共通棟で行われる。

そのため、１日の大半をすごす共通棟に近い方が人気がある。

ちなみに、マリスの希望はシィーラ寮である。理由は、シュタイン家に一番近いからである。

畑の方は、門番のジョンソンや庭師兼警備員のおじいさんにお願いしている。しかし、最近栽培を始めたビート（砂糖大根）の生育が気になるのでなるべく見に行きたいのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ウチの寮の隣にある食堂はホントおいしいよ～」
「我が、ベーゼ寮では共通棟にも専門棟にもちかいぞ」
「いや、ウチのアーノル寮は正門に近いから、いろいろと便利がいいよ～」
きいいいいいいいいんと響き渡るスピーカーの音とともに、各寮の代表者たちが新入生の勧誘を行っている。

マリスは、いち早くシィーラ寮のブースに着いたからなのか、あまり人が集まっていない。
その原因は、きっとマリスの前にいるシィーラ寮代表のせいであろう。

「……研究棟にも近いため・・・研究に没頭できます・・・」
代表の声に合わせて薄気味悪い音楽が鳴っている。

（なんだか、不安になってきた。）

「先輩、この音楽はなんですか？」
我慢ができなくなって、マリスは聞いてみた。
「よくぞ、きいてくれた！この音楽は自分が開発した不安をあおる音なんだよ。不安を抱いた人たちは、自分の勧誘を聞いて救いを求めにこの寮に入るようになるのさ！」

自慢げに右手でグッとスピーカーを握り締め、左手で気色悪い音楽を流している機械をなでている彼には、周りの様子は見えていないようだった。

逆効果になっていると思うのだが……かえって不安に陥った新入生たちは他の寮に行っている。

マリスは、適当に相槌を打った後、見知った人物を見つけた。

「ロゼ！ひさしぶり。」

シィーラ寮の塊の中にロゼがいた。
すぐにロゼの姿が目に入ったのは、シィーラ寮を希望している女性が、現在マリス以外では彼女しかいなかったからだ。

「ひさしぶり。」
「シィーラ寮は人が少ないね。」
「静かでいい。」
「女性がいないね。」
「ちょっと困る。……被験者がいなくなる。」

（被験者って何〜？）

マリスもそうだが、ロゼも口数が少ない。そのため、会話が発展しない。
会話相手が少ないのも寂しいが、とある理由で女性がいないと困るのだ。

今後ビートで砂糖を作り、スイーツをつくって試食してもらうのだ。
この国では、クッキーやスコーン、マドレーヌといったお菓子はあ

る。しかし、お菓子とはいっても砂糖が入っていないためあまり甘くない。中に入った果物の甘みがあるだけである。
砂糖はあるが、この国では取れないため高価である。
そこで、マリスが目をつけたのがビートだ。
この国では、もともと葉を食べる野菜だった。初代シュタイン子爵の『我の冒険記』によれば、この植物の根は甘くておいしかったらしい（食物繊維が硬く、土も一緒に口に入ったため、食用にするには気が向かなかったらしい。）
そこで、このビートのなかで特に甘みが強いものを栽培しているところなのだ。これが成功すれば、砂糖を抽出してあま～いスイーツがつくれるのだ。
初めての試みのため、甘いものが大好きな女の子たちに試食してもらい、まずは口コミなどで広めるつもりだ。

そのためには、身近でモニターがほしいのだ。

「ロゼ！ちょっと、あの先輩からスピーカーを借りて（奪って）この寮の宣伝して、女の子を集めるわ。」
「被験者がほしい。私も協力する。」

一致団結して、再び宣伝している先輩のもとに向かおうとしたとき、派手な巻き髪の女の子がスピーカーを奪った。

「何ですの？このスピーカーと音楽は！」
「この音楽は人間の持つ不安を増幅させるために・・・・」
「不安あおってどうするんですの！みんな離れていってますよ！」
「うぐっ」

今、この寮の希望者は、オタク風な男性が3人と、マリス・ロゼ・なぞの女性の6人だけだった。
ちなみに寮の定員は25人である。

「このスピーカーを貸して下さい。私が宣伝しますからその音楽を止めてくださいな。」

あわてて、先輩が音楽を止めた後、彼女は演説を始めた。
その甲斐があって、入寮希望者は倍以上の15人にまで増えた。

結局、他の寮から3人流れてきて、シィーラ寮の今年の入寮者は18人になった。

21．勧誘（後書き）

新キャラの名前を募集します。

巻き巻きクルクル髪の彼女です。

ミゼル・〇〇〇〇・ロランジュ

この〇〇の中に名前を入れたいのですが、何かいい名前は無いでしょうか？

文字数は決まっていません。

よろしくお願いします。

※名前の募集を締め切ります。ありがとうございました。

２２．寮案内（１）（前書き）

寮の設定を考えていたら、いつのまにか時間が経っていました。
すいません。

そして、いつのまにか、評価が上がっていました。
皆様ありがとうございます。

22．寮案内（1）

シィーラ寮を第1希望にした15人のうち、女性はマリスとロゼと謎の巻き毛少女だけだった。ちなみに、他の寮から流れてきた3人（他寮が人数オーバーで流れてきた）の内訳は、男性1人に女性2人だった。

つまり、今年の入学者のうちシィーラ寮に入る女性はたった5人だけなのだ。

マリスたちは、入る寮が決まるとさっそくクロークから荷物をもらい、シィーラ寮に向かった。

シィーラ寮は4階建てで、左右対称なつくりになっている。

寮のエントランスを抜けると、大広間が広がっていた。

大広間には、眼鏡をかけた細身の男性と、ちょっと派手な印象の女性が待ち構えていた。良く見ると、その2人は、性別とめがねの違いだけで顔がそっくりである。

「みなさん、シィーラ寮へようこそ！俺は、シィーラ寮副寮長のハリソン・デル・フィーピー。隣にいるのは、僕の双子の姉のリリエン・デル・フィーピーだ。君たちは、この寮について寮長から何か聞いているかな？」

（……寮長？）

新入生の頭の中には、はてなマークが広がった。

「ほら、君たちをここまで連れてきた彼だよ。」
みんなで指を指された方を見ると、寮の紹介をしていた先輩がいた。
「寮長！もしかして、名乗っていなくて、だまってつれてきたんですか？」
リリエンが寮長を問い詰める。もう、どっちが寮長か分からない。
「いや…ね。みんなヒヨコみたいにひょこひょこついてくるから…。」
寮長が口ごもりながら言い訳をする。
自分の発明の紹介をしていたときの自信はもうどこにも見受けられなかった。
「それ、言い訳になりますか？もういいです。あなたを行かせたのが間違いでした。俺たちが責任をとって、新入生たちに説明をするので、寮長はもう部屋で休んでいてください。」
さらに、ハリソンがめがねを指先で押し上げながら止めをさした。
……この寮長は人望がないらしい。
なぜ、この人が寮長になったのだろうか……。
それは、彼が優秀な発明者だからである。（ガラクタもたくさん生産しているが…）
皆で、しょんぼりと階段を上がっていく寮長を見届けた後、副寮長たちは新入生の方へ目線を向けた。
「では、いまから皆さんに、この寮の使い方とルールを教えます。この寮には最新鋭の設備が備わっています。順番に説明していきますね。今、私たちがいる大広間は、このシィーラ寮のロビーであり寮の人間が全員集まるときに使います。掲示板にも何かお知らせが載っていることがあるので、定期的に見てください。広間のむかっ

て左側にあるのが女性用風呂場、右側が男性用の風呂場です。」

と、ここで勇気ある質問を入れた者が居た。

「女湯をのぞいた奴はいますか～？」

「浴室周辺には、実験的に作成されたカラクリが多数置いてあります。非人道的なものも多くあり、最近では逆さづりになった男子生徒が発見されています。かかった罠が、薬を打ち込むタイプではなかったのが残念です。」

今、さらっと恐ろしいことを言った気がする。かなりやばい罠があるようだ。

「この1階のことで何か質問のある人はいますか？」

だれも、質問しなかった。

22．寮案内（1）（後書き）

ちょっと長くなりそうなので、（2）に続きます。

23．寮案内（2）

1階の共有スペースの説明の後、マリスたちは4階に案内された。

「一年ごとに寮の部屋が変わります。一年生から順に4階から降りていきます。どの階も中央の入り口から見て、左側が女子寮、右側が男子寮となっています。ちょうど、1階の浴室と同じです。女子寮と男子寮は中央でつながっていて、中央が談話室になっています。女子寮、男子寮のどちらに行くにもこの談話室を通ることになります。もちろん、災害時の非常用の脱出路はありますが、基本的な出入り口は男女共通になっています。」

「ちなみに、女子寮・男子寮の入り口にはそれぞれ精神力認識装置がついているから、誰かに招かれない限り（・・・・・・・）侵入はできないからね。」

リリエンの説明の後に、ハリソンが付け足した。

「ハリソン……。調子に乗って余計なこと言わない。」

「可能性の一つだよ。姉さん。」

誰かが手引きすれば入れてしまうのだ。しかし、すぐに見つかってしまうだろう。

見つかった場合のリスクを考えれば、入らないほうが得策だ。

「もちろん、各部屋も精神力認識装置があり、扉がしまると鍵も閉まるオートロック式なので、安全に研究成果を隠すことができます。」

精神力は指紋と同じように、個人によって波長が異なっている。精神力認定装置は、この性質を利用し２０年位前に開発されたシステムだ。特殊な鉱石に精神力を流すと３０秒ぐらい波紋が出る。この波紋と登録した精神力の波紋が一致すると、扉が開く仕組みだ。また技術院なので、あまり使用されていない最新鋭のカラクリであるオートロックがある。

「何か、質問はありますか。……無いようでしたら、男子・女子に分かれて寮内部の案内をしたいと思います。」

手を挙げそうになっていた人が居たが、軽くスルーされた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「では、女性の皆さん。これから、精神力の登録を行います。くれぐれも誰か、特に他の寮の男性を引き入れたりしないように。では、まずミゼル・フィリカ・ロランジュさんから。」

クルクル巻き毛の人が前に出てきた。あのスピーカーを寮長から取り上げていた人だ。

ロランジュ家といえば、日用品などの小型カラクリで有名な家である。名前からも分かるように、オランジュ家とは親戚に当たる。

「次は、マリス・カトリーヌ・シュタインさん。」

マリスは、手を鉱石の上にのせて精神力をこめる。すると、波紋が浮かび上がった。

「あら、ちょっと珍しい形をしているのね。じゃあ、次のロゼ・オールディー・ローズさん。」

精神力の波紋が少し変わっているのは、マリスに前世の記憶があるからだろうか？しかし、精神年齢が変わっても、精神力の波紋は一生変わらない。

波紋を気に留めるのは、一瞬ですぐに次のロゼが呼ばれた。
ロゼの名前が呼ばれたとき、周りが一瞬静かになった。

ロゼの精神力の認識が終わったあと、残りの2人――ヘルティ・エリサン・ヒルザイトとミリー・ハイランの認識が行われた。第一希望がシィーラ寮ではない……つまり他の寮から移された2人である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「全員の認識が終わったわね。はいるときは、入り口の石に手を当てて精神力を送り込めば開くわ。」

リリエンの口調が少しずつ崩れてきている。これがきっと彼女の素の話し方なのだろう。

中に入ると、すぐにリリエン作のくじを引いた。
これで、部屋割りが決まるらしい。

「部屋の場所も決まったことだし、中の説明をするわね。ここには、掃除の人はいないから週1回自分たちで掃除してね。部屋の中については見れば分かるから、説明は抜きね。質問があったら後で聞い

て。一番奥の突き当たりの部屋が洗濯機兼乾燥機があるのよ。」

ずんずんと進んでいくリリエンの後を、マリスたちはあわてて追った。

「これよ。」

リリエンたちの目の前には巨大なロッカーのような箱があった。

「この中のハンガーに衣類をかけて、スイッチを押して一時間後に洗濯と乾燥が出来上がっているわ。あまり知られていないカラクリで、まだこのシィーラ寮にしかないのよ。ちなみに、あの寮長の最高傑作よ。これをつくったから、彼は寮長になれたの。」

すごいとマリスは思った。

まだ、このカラクリがどれくらいの洗浄力と脱水力を持っているか分からない。しかし、前の世界でもハンガーにかけたままできる洗濯というものは無かった気がする。（マリスが知らないだけかもしれないが。）

「ここに衣類が置きっぱなしだと、次に使いたい人が困るから早めに片付けてね。非常口は、この洗濯室の横についているこの扉ね。いつもはしまっているけれど、非常事態になると勝手に開くから安心してね。」

リリエンは話しながら、洗濯室の外に出て行く。

「次は、各部屋の精神力の認識ね。誰も使っていない部屋は、勝手に使っていいから。あ、でも掃除はきちんとしてね。」

入り口と同じやり方で、精神力を認識していく。

「じゃあ、全員分終わったわね。質問は無いわね。あったら後で聞いてね。……私、今作りかけの作品があるのよ。」

こうして、リリエンによるざっくりとした女子寮案内は終わった。

23．寮案内（2）（後書き）

一応、これで寮案内はおしまいです。

途中から急ぎ気味なのはすべてリリエンのせいです。

２４．部屋の内部構造

慌しくリリエンが去ってしまったので、とりあえずマリスたちは自分の部屋に入り荷解きをすることにした。
マリスの部屋は、談話室と洗濯室のちょうど間くらいの距離にある。この場所が吉と出るか凶と出るかはまだ分からない。
マリスは、さっそく精神力認識を行い部屋に入った。

「広い……。」

これが、マリスが部屋にはいったときに感じた印象だ。
寮ということで、部屋はもっと狭いとマリスは思っていた。
履物を脱いで（くつろぐためか、履物を脱ぐスペースがある）、最初に入った部屋は、マリスが前の世界で住んでいた１ＬＤＫのアパート（就職した当初住んでいた）が、一部屋分はいってしまいそうな広さだ。
しかも、寝室のスペースが別室として確保してあり、収納スペースも沢山あるようだ。
ただ、残念なことに洗面所はあってもトイレはない。
この王都の下水と排泄物の管は違う。きっと、処理の関係でトイレをたくさん置けないのだろう。
そして、一つだけ小さなコンロがあった。この国のコンロは、精神

力を流すことによって発火するようになっている。
定期的に中に入っている鉱石に精神力を充電しなくてはいけない。
今は、どうやら空のようだ。どちらにせよ、2人以上の精神力が鉱石の中で混じり合うと反発し合うことが多いので、一度中に入った精神力を空にしないといけない。

寝室に入ると、ベッドの上に布団がすでにセットしてあった。布団をめくると、敷布と同じくらいの大きさの布の袋が入っていた。袋の端がベッドの下においてあるカラクリに繋がっていた。
カラクリに貼り付けてある紙には『乾燥カラクリ』と書いてあった。

（もしかして、これって布団乾燥機！？）

これなら、部屋の中で布団を乾燥させることができる。
さすがに、技術院は違うとマリスは思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部屋のチェックが終わり、荷解きも終わった。
元々、あまり多くの荷物を持ってきていない。全寮制だが、自由に屋敷に戻れる距離である。必要になったら、屋敷に取りに戻ればいいという考えだ。

さっそく、マリスは乾燥カラクリ（布団乾燥機）でフカフカになった布団に大の字で横になってみた。

まだトイレの場所を確認していないし、明日から始まる授業の準備もしなければいけないのだが、マリスは布団の暖かさに負けてつい

うとうとしてしまう。

（このふかふかのお布団がいけないのよ！）

完全に布団が悪者になっている。

シュタイン家でもメイドさんが布団を日中干してくれていたが、乾燥したての布団の暖かさには負ける。

後もう少しで、夢の世界へ旅立つという時……

“ゴン！ゴン！ゴン！”

無情にも、部屋の扉が叩かれた。

２４．部屋の内部構造（後書き）

なかなか学院生活が始まりません。

でも、内部構造はおさえておかないと後々苦しいのです。

ご理解くださいませ。

２５．最初の波乱（前書き）

ちょっと、文章が不安です。

揉め事は少し苦手＞△＜

25．最初の波乱

マリスは、ベッドからのそりと起き上がると、寝室から出て部屋の入り口に向かった。
入り口の扉にあるのぞき窓で誰が来たかを確認する。――クルクル巻き毛のミゼルだ。

「なんでしょう「こんにちは！マリスさん…でよろしいですわよね？」」

扉を開けた瞬間、いきなりすごい勢いで、ミゼルはマリスに話しかけてきた。
マリスは半分まだ寝ぼけている状態なので、十分な反応ができない。

「一度、皆で談話室に集まりません？」

語尾は疑問系を取っているが、有無を言わせない言い方だ。
現にミゼルは、マリスの扉の取っ手を握っていない左手を、両手でしっかり握っている。

このまま引っ張って連れて行きそうな勢いである。

「わかりました。」
「では、他の皆さんも呼びに行きましょう。」

こうして、マリスは半強制的に部屋から出されることになった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のこりの3部屋からもミゼルが（・・・・）半強制的に談話室へ連れて行った。

談話室に行くと、男子寮の人たちが居た。こちらも誰かが無理やり集めたらしい。

集めたのは、先ほど「女湯をのぞいた奴はいますか～？」と空気を読まない質問をした人だろう。

なぜなら、今この場を仕切っているのは、ミゼルと彼だからだ。

「はじめまして、俺の名前は、ルートゥス・ハヴィアン・エリザイル。自己紹介からといきたいところだけど、準貴族の俺が仕切んのもアレなので、誰か代わりに仕切ってくれませんか？」

もう十分この場を仕切っている気がする。

「もう十分仕切ってますわ。学院では、準貴族とか貴族とか関係ないでしょう。」

ミゼルがムスッとして言う。身分を持ち出されたのが気に食わなかったようだ。

ルートゥスも「準貴族とか貴族とか関係ない」といった言葉を引き出すために言ったようだ。

「本当にそうかしら？」

ここで、ミリー・ハイランが話の流れに水を差した。

ミリーは、癖が強いオレンジ色の髪を肩にぎりぎり着かないところまで伸ばしている。

マリスの彼女に対する第一印象は「性格キツイよね。きっと」である。

「私は、成績が悪かったから、こっちに飛ばされてきたけど、ヘルティは違うのよ。……貴族のお嬢さんが私と一緒に来るはずだったけど、にらまれてしょうがなくこっちに希望を出したの。」

「ミリーちゃん……。もういいよ……。」

ヘルティがミリーの後ろから弱弱しく言った。ヘルティは淡いクリーム色の髪をみつあみにしている。彼女自身は、準貴族ではないが、彼女の親は準貴族だ。準貴族は、一代限りである。成人前は、親の庇護下にあるため、後ろ盾の貴族の名前が最後尾についている。彼女のフルネームの『ヘルティ・エリサン・ヒルザイト』のセカンドネームの『エリサン』だが、親が準貴族になる前の苗字だ。準貴族の子は成人すると、後ろ盾の貴族の姓が名前から取られることになっている。

もともとヘルティの気性が弱弱しいと言うこともあるが、基本的に後ろ盾となっている貴族、またはその子息には逆らえない。

ヘルティがこのシィーラ寮に来るしかなかったのだ。

とはいっても、後ろ盾のヒルザイト家の息女から離れる口実ができたので、ヘルティとしては良かったと思っている。

「やっと、はなれられるんだもん。」

「それは現実逃避よ。それに、貴族の言うことは信用できない。」

ミリーは貴族に対して、強い不信感があるようだ。

周りがザワザワとし始める。

「それ、八つ当たり。」

その中で、今まで沈黙を保っていたロゼがポツリといった。

「確かに、僕たちが何かをしたと言うわけではないしね。これから寮の中では、身分関係なしということでいかない。呼び方も皆ファーストネームだけでいいかな。」

一番この場で、爵位が高いレックス・コンラル・サラザントが言った。彼は、外交関係のサラザント侯爵の跡取りだ。（彼が貴族の多いアーノル寮ではなく、このシィーラ寮を選んだことを、皆不思議に思っている。）

普通、貴族は知人レベルではファーストネームとセカンドネームを一緒に呼びあう。

マリスだったら、『マリス・カトリーヌさん』と呼びかけられる。セカンドネームは準貴族以上しか許されていない。そのため、準貴族以上であるという証拠になるからだ。（準貴族の子の2番目の名前は、厳密にはセカンドネームではない。）

セカンドネームを呼び合わないことで、普段の生活では身分間の隔たりをなくすという効果を期待しているのだ。

他の貴族の生徒は、この中で一番家の爵位が高い彼の発言を否定す

ることはできない。
不本意な顔をする者は今のところいなかった。

「では、自己紹介でもファーストネームとファミリーネームだけにしよう。ルートゥス、司会をよろしく。」
「では、お言葉に甘えて。……男子寮と女子寮で交互に部屋に近い順に自己紹介していくというのはどうでしょうか？」

こうして、自己紹介が行われたが、マリスはこれからの寮生活が少し不安になった。

２５．最初の波乱（後書き）

次話から、やっと授業が始まります。

２６．最初の課題（前書き）

微妙なところで切れて短いですが、投稿します。

26．最初の課題

入学式の次の日、つまり今日から授業が始まる。入学して初めのうちは共通棟での授業である。
マリスのいるシィーラ寮は共通棟から遠いので早めに移動しなければいけない。

寮を出て、すぐにある食堂でマギパンとスープと果物を食べた。朝のメニューは全員共通になっている。
シュタイン家での米粉入りモチモチパンに慣れてしまったせいか、少々パンがボソボソに感じられた。
スープは、コンソメ風味だが塩が足りない気がする。
果物は、サラダがわりになっている。前の世界の瓜のようなものが大量に切っておいてあった。

この技術院では、食費も含め、学費はすべて無料である。ただし、貴族や規定以上の所得を持つ準貴族は、一定以上の寄付金を払わなければいけない。シュタイン家の場合は、寄付金の代わりに野菜を納入している。

マリスは、食事を終えた後、自分の部屋に戻った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部屋に戻っても特にやることはない。

着ている服の上から、学校指定のローブを羽織り最低限の筆記用具とノート（まだ何がいるかよく分からないので）を持ち、マリスは部屋を出た。

ちょうど、部屋からミゼルとロゼも出てきていた。

「おはよう。ミゼル、ロゼ。」

談話室へでる一歩手前だったミゼルを呼び止める。

「おはよう、マリス！ロゼ！」

ミゼルがクルンと振り返ると、今日はポニーテール（やっぱりクルクル巻き毛）のしっぽもクルンとなり、扉にビシッと当たった。――あれは、立派な凶器だと思う。

「……おはよう。」

ロゼは眠たげに目をこすりながらドアを閉める。朝がつらいようだ。

こうして、三人は一緒に、共通棟に行くことにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「人間にとって、生きていくためにないと困るものは何か！」

教壇には、先端の曲がった杖を持った、立派な白いひげを生やした教授が熱弁している。

「そこのおぬし！何じゃと思う？」

一番前に座っていた生徒にいきなり話を振った。

「地位と名誉です！」

「バカモン！！！」

“ベシッ！”

答えた生徒は、軽く杖ではたかれた。

「そんなことを言っておると、すぐに足元をすくわれるぞい！そこのおぬしはどうじゃ？」

また、近くの生徒が当てられた。

「お金と人脈です。」

恐る恐る答えた割には、内容がアレだ。

「半分正解じゃ。金や地位や名誉は簡単になくなる。しかし、人脈はすぐには無くならん。まあ、金の切れ目は縁の切れ目という言葉もあるが、金でつながっているとそうなるのじゃ。人間のつながりは大切じゃ。ほれ、今、おぬしたちが着ておるそのローブの背にあるレアンデールの印章も沢山の人によって考えられ作られたものじゃ。」

学院指定のローブの背には、大きな印章がある。この印章は技術院のマークである。

皆、それぞれ背中を確認する。

「そこでじゃ、印章を傷つけぬように、そのローブを改造してくるのじゃ！印章を傷つけなければどんなデザインでもかまわん。ただし、レアンデールの学院街に住む、自分以外のだれかにやってもらうのじゃ。間違っても、自分の家のお針子にやってもらった奴は、

この講義は落第じゃ！期限は5日後まで、できたものから、ワシの研究室に持ってくること。では、少々早いがこれで今日の授業はおわりじゃ。」

皆、顔を引きつらせて、荷物を片付ける。

技術院の付近はレアンデール学院街と呼ばれ、書物やカラクリを扱う店が多くあり、税金が安い。とはいっても、税金が安いのは、30歳までである。若い職人たちが店を立ち上げるのを助けるための措置である。当然、熟練した職人――つまり、貴族御用達の者はほとんどいない。

ローブは、年に2枚しか支給されない。布地自体に特殊な加工がしてあり、貴族でもなかなか手にはいらない。
失敗したら、そのデザインで半年過ごすことになる。

無名の職人たちの中から、服飾関係の良い職人を探すのは、至難の業である。

２６．最初の課題（後書き）

地震の被害が悪化していますが、皆様大丈夫でしょうか？
また、地震被害に遭われた方々には心よりお見舞い申し上げます。

私のいる地域では、確かプレートが違うので最初の地震だけ揺れましたが、無事です。電力が足りないと言うことなので、節電に心がけています。（ご飯時は電気を極力使わないようにしています。）

皆様十分にお気をつけてください。

２６．５　番外編・非公式な試験問題閲覧（前書き）

お気に入り登録、１０００人突破ありがとうございます！！

実は今回の話は、主人公が全く出ません。

皆さん初登場の方々です。

将来的に重要人物になり、時系列的にここで足した方がよいと判断したため載せます。

後々の展開にとって、重要な場面になる予定です。

26．5　番外編・非公式な試験問題閲覧

明るい日差しが差し込む王宮のとある一室にて、４人の青年がゆったりとした椅子に座り、机に書類を広げていた。
この書類は、王都にある全学院の入学試験の答案用紙だ。もちろん、機密文書扱いで一般人が見れるものではない。

「今年も、無事技術院の入学式が終わったな。さて、この中に高物件（良い人材）は居るかな？」
この中で一番、身なりが良い青年が書類をパラパラとめくっていた。
ふんわりとした金髪に、陽だまりのような笑顔を浮かべているが、目の奥の光り方が尋常ではない。
見た目だけの人間ではないことが窺（うかが）い知れる。

「これなんか、いいんじゃないですか～。ボクがパラっと見た感じでは、奇抜な感じで面白いですよ～。」
ウェーブした髪を肩まで伸ばした青年が、一枚の紙を皆に見せた。
「ん？……ってこれは、俺のかわいい妹のじゃないか！勝手に見るな！お前が見ると、紙どころか妹まで腐る！ジェイ、お前は見るな！」
「ええー。この答案用紙持ってきたのボクなのにぃ～。ライのけち～。こっそり持ってくるのたいへんだったんだよ。」
ライは、ウェーブの髪のジェイの言葉に耳を貸さず、妹の答案を取り上げた。
「ライ、君の妹は使えそうと言うことでいいじゃないか。ところで

二人とも、高物件の選別は進んでいるかな？進んでいるよね。」
ふんわりとした金髪の青年が確認する。口調は柔らかいが、やはり目は笑っていなかった。

「もっちろん進んでマスよ。」
「かなり進んでます。このジェイと違って。」
二人とも、慌てて書類に目を通していった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最後の一人、銀髪の青年は書類を三つの山に分けていた。
その中の一つを見て、ジェイが面白そうに笑った。
「フランちゃん、この山はかわいい女の子が多いね～。カノジョにしたい子の候補かな～。公私混同はいけないよ。」
その声に、銀髪の青年が不機嫌そうに青筋を立てながら答える。

「その『フランちゃん』はやめろ。それから、これは『視界にも入れたくない人材』の山だ。」

「ふ～ん。かわいい子多いのにね。遊ぶ分にはいいんじゃない？使い捨てにできるし。フランの女性嫌いもそれなりに直るんじゃない。」

「余計なお世話だ。それにお前もほどほどにしろよ。――この中に、うっとうしい家がある。」

「まあ、めんどくさいのはいやだね。」
ジェイにしては、あっさりとひいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
――2時間後

「さあ、皆！選別は済んだね。高物件はどれくらいいたかな。」
金髪の青年の一声で、良い人材の答案だけが中央に集められていく。

「あれ？めずらし～。フランちゃんが女の子を選んでる。」
「フランさん、眼鏡壊れたみたいですね。直しましょうか？」
「フランにしては本当に珍しいね。良い子なのかい？」

上から、ジェイ、ライ、金髪の青年である。

「彼女、嫌がらせ問題全問正解しているんだ。」
嫌がらせ問題とは、技術院で出た数学の問題である。解けないことを前提とし、そこで時間をつぶさせるために作られた問題だ。できる問題、できない問題の取捨選択を迫られる。

「へぇ、後の問題に支障をきたしたわけでもなさそうだね。まあ、どんな理由でも女性に興味を持つことはいいことだね。跡取りも必要だしね。」
「ジオ、お前に言われたくない。」

フランは、金髪の青年ことジオに言い返した。

２６．５　番外編・非公式な試験問題閲覧（後書き）

蛇足かもしれませんが、ちょっと文章力が不安なのでまとめます。

金髪→ジオ
ウェーブの髪で軽い→ジェイ
シスコン→ライ
銀髪→フラン

一応、ニックネームです。

27．再会

最初の講義を1つと、その他の講義の説明を受けたら今日は学校の予定はおしまいである。
とはいっても、やることは沢山ある。

まず、その他の1年間受ける講義の本を購入しなければいけない。
学院内部では販売していないため、学院街に行かなければ行けない。

そして、一番大変なのが、ローブを改造してくれる職人探しである。

マリスたちは、寮の先輩に聞くことにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あ～、それって歴史学のシーディド教授の最初の授業よね。」
副寮長のリリアンが答える。シィーラ寮の副寮長は『フィーピー兄弟』となっているため、リリエンも副寮長である。

「私たちのときもあったわよ。改造の仕方が物足りないと、評価が落ちるのよ。それに、良い職人って言うのは、人が殺到するからね。時間がかかって期日に間に合わないことが多いのよ。学院街に住んでいる職人なら誰でもいいという条件だから、誰か手先が器用な知り合いを探した方がいいわね。紋章を傷つけてはいけないから、信用の置ける人間でないと……。」

どうやら、リリアンたちも相当苦労したようだ。

「知り合いなら、ちょうど居ますわ。」

そこで、ミゼルが何かを思い出したように大声を出す。
「どんな知り合いなの？」
マリスが聞く。
「兄の知り合いで、ちょっと変わった人ですけど、兄の発明を活用してこれから店を立ち上げるという人が！大体どのあたりに住んでいるか分かるので、さあ、マリス、ロゼ行きましょう！先輩ありがとうございます！」
と言うと、ミゼルは強制的にマリスとロゼを連れ出して、その知り合いのところへ向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「カル姉！」
「あらぁ、マリス！なんでここを知っているの？開店直前に知らせようと思ったのに。」

そこには、孤児院で一緒だったカルドーラがいた。長屋のようにつながった店の一つで開店準備をしていた。

「マリス……、知り合いなのかしら？この方が目的の人ですわ。」
偶然というのは、恐ろしいものである。

「あら？もしかして、ライの大切な妹さんかしら？お兄さんの発明を使って、この店を立ち上げることにしたのよん。まあ、こんな路上で立ってないで、中にどうぞ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

マリスたちは、中の従業員専用の部屋に通された。そこで、ここを

訪ねたわけを話した。

「ライの発明の『ミシン』っていう布を縫うカラクリを使うのよ。ワタシは服をデザインするのは得意だけど、ちまちまと縫うのは苦手だからねぇ。まだ開店してないから、ミシンとワタシのデザイナーとしての腕があれば、3日くらいで3人分の改造ができるわよ。」

カルドーラは快く、承諾した。自分の腕にとても自信があるようだ。

「時間、大丈夫？」

今まで、空気の気配が無かったロゼが口を開いた。

今まで、開店準備をしていたのだ。開店日も決まっているので、時間はカルドーラが言うほどないに違いない。

「これくらいの時間は大丈夫よ。まあ、その代わりお店の宣伝はしておいてちょうだい。」

冗談交じりにカルドーラは言った。

２７．再会（後書き）

まだまだ、孤児院メンバーは出る予定です。

ミゼルの兄と２６．７話のライは同一人物です。

28．ロマンス・グレード（前書き）

話が進まないのであります（、、、）

28．ロマンス・グレード

デザインの確認のため、カルドーラとまた次の日に会う約束をした。

次は、本の購入である。

学院街の北に直線に走るロマンス・グレード通りがある。ロマンス・グレード通りは別名『書庫通り』と呼ばれていて、古今東西あらゆる書物が集まっている。

カルドーラの店は、学院街の南西に位置しているため、それなりに距離がある。しかし、今日本を買わないといけない理由がある。

――学院のローブを着ていると、本が1割引きで買えるからである。学院の生徒は、将来お得意様になる可能性が高いためだ。本格的な講義がはじまるのは、5日後でまだ猶予がある。でも次の日では、カルドーラにローブを渡してしまうため、実質的に今日しか1割引きにならない。大貴族や大商家ならともかく、伯爵と子爵の中流貴族であるマリスたちにとって、倹約は必要なのだ。

「一度、寮に戻って良いかしら？」

ふと、思い出したようにミゼルが言った。

「学院を通過するから問題ないわ。」

「いいよ。」

二人の了承を得て、ミゼルは寮に戻った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

寮から出てきたミゼルの手には、金属の骨組みに布がついたものが三つ抱えられていた。

「おまたせしましたわ！」
ミゼルは軽く息を切らせていた。

ミゼルは折りたたんであった骨組みを開き、布を膨らませる。すると……どこかで見たことがあるようなものがあった。

（前世で、おばあさんとかが良く引いてるカートだ！）

「これは、この布の箱の部分に荷物を入れて運ぶためのカラクリですわ。車輪の部分に小型のカラクリがあって、腕に負担がかからないように作られていますの。我が家の試作品ですので、お渡ししますわ。使った後、感想をくださいな。」
つまり、このカートのモニターになってほしいということだろうか。

「この中に本いれるの？」
ロゼが珍しそうに眺めている。この世界では、同じ車輪付きでも、一輪車のような大型のものはあるが、旅行用のケースのような小型のものはまだ無かった。

「ええ。この布は耐水性で丈夫に作られていますから、大丈夫ですわ！」
自信満々にミゼルが答える。
マリスも、長距離本を持って歩かなければいけないと思っていたので、大歓迎である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

必要な本は、ロマンス・グレード通りですべて手に入れることができた。本をミゼルからもらったケースに入れて、寮への帰路に就いた。

「ロゼ、マリス、このカラクリはどうでしょう？」
寮へ着くと、さっそくミゼルが感想を聞いてきた。

「車輪が２つじゃなくて、４つの方が良い。それか、車輪がついていないほうは、何か板をつけてほしい。倒れそうになる。」
これは、ロゼの意見である。
「布のふたの部分に、小さな鍵がほしいわ。それと、方向転換がしやすいように、もっと車輪が回転するといいと思う。」
これは、マリスの意見だ。

「ありがとう。二人とも助かりますわ！」
ミゼルは、二人の意見を一生懸命メモしていた。

「ミゼル。これは、誰が作ったの？」
ロゼが疑問を口にした。
マリスも気になっていたところである。

「兄ですわ。」

「素敵なお兄様ですね。あってみたいですね。」
マリスがそういうと、ミゼルがため息をついた。
「会いに行かなくても、明日会えると思いますわ。」

……ミゼルはどこか遠い目をしていた。

28．ロマンス・グレード（後書き）

ロマンス・グレード通り→始まりはロマンス小説が大好きなグレード婦人が、自分の好きな小説を広める（布教する）ために作った店だと言われている。店の人気に引き寄せられるように書店が集まったとされる。

おそらく、この設定は本編で出てきません。

次回、あの人が登場します。

29．ミゼルの兄

――次の日

「フィ～リ～カ～！会いたかったよ～！」

なんだか変なものが、カルドーラの店の前に居た。

首からゴーグルのようなものをぶら下げていること以外は、普通の成人男性に見える。

言動を気にしなければ。

『フィリカ』はミゼルのセカンドネームなので、ミゼルの知り合いなのだろう。

「お兄様、なぜここにいらっしゃるのですか？」

「もちろん、フィリカに会いに来たからさ！」

どうやら、ミゼルの兄らしい。

マリスもロゼも引いてしまっている。ミゼルはあきらめたような顔をしている。

「カルドーラから、フィリカが来るって聞いてね。居ても立ってもいられなくなってきたわけさ。」

すると、店の中からカルドーラが出てきた。

「店に来た（・・）って言ったら、無理やり喋らされたのよん。」

ミゼルの兄の後ろで、カルドーラがボソッと言ったが、ミゼル兄

には聞こえない。

「それよりも、フィリカ！どうして、お兄様に内緒で技術院に編入してしまったのかな？技術院はむさくるしい男の巣窟だ！かわいいフィリカが心配だよ。」

「芸術院は真っ黒な女の巣窟でしたわ、お兄様。あんなところもう十分ですわ。」

「何があったんだ～？フィリカ。」

二人の会話は止まりそうにない。

（うっわー。リアルシスコンがいるよ。はじめてみた。それにしてもミゼルは、芸術院に居たけど、こっちに入学しなおしたのかな？）

完全にマリスたちは傍観に徹していた。

「二人とも。店の外で立ち話してないで、入ったらどう？」

カルドーラが提案して、店の中に入っていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ついつい、興奮してしまって失礼したね。僕は、フィリカの兄のライゼル・ロマン・ロランジュだ。二人とも、ウチの妹をよろしく。」

店の中で一息ついた後、自己紹介をされた。

「こちらこそ、ミゼルにはお世話になっています。あの、荷物を運ぶカラクリはとても便利ですね。」

出された茶を飲みながら、マリスが言った。

「今度、ウチから売り出す新商品なんだ。小型化が難しくてね。苦

労したんだ。」
苦労したと言いながら、商品を褒められてライゼルは笑っている。
「その、首からかけているの何？」
ロゼがライゼルの首にあるゴーグルを指差す。
「ああ、これは、目を保護する機能もついている拡大機だよ。いつも、つけれるように首にかけているんだ。」
ライゼルが答えた。

＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「さあ、これが考えたデザインの案ね。」
それぞれのデザイン案をカルドーラがテキパキと並べていく。

「細かく、考えてありますわね。」
とミゼルは感心した。
「カル姉、私はこのデザインでいいわ。」
とマリス。
「左の袖も同じにしてほしい。」
とこれは、ロゼの意見だ。

三人とも、ほぼ満足のデザインらしい。

「じゃあ、三人とも二日後に取りに来てちょうだい。」

三人は、カルドーラにローブを預け、店を後にした。

29．ミゼルの兄（後書き）

ようやく、ミゼル兄のライゼルが登場。
でも、初登場ではありません。

現在、建国史（王国史）を考え中。
簡単な歴史です。

できたら、技術院の講義の中に出てくるかもです。

※4月6日に誤字修正を行いました。

３０．おにぎり（前書き）

なかなか、思ったとおりの展開までたどり着かないですね。
今は、準備期間ということですね……。

30．おにぎり

――ローブを預けた次の日

ローブが出来上がるのは明日のため、マリスは一日暇を持て余している……わけではない。

今日は、田植えの日である。

コメの特許が出たので、屋敷の田を縮小し、領地の方にコメを栽培したいとマリスは思っていた。とはいっても、田んぼに適した土地への改良や人員の問題があるので、大々的にはできない。

そこで考えたのが、『荒地になりかけている土地』を利用することである。

『荒地になりかけている土地』とは跡継ぎが無い、または畑を継ぐ人間がいなくなって荒地になりかけている土地である。そういった土地はシュタイン家で管理し、別の農家で畑を継ぐことができなかった次男・三男などに渡されることが多い。このような荒地になりかけている土地の一部を田んぼにすることにしたのだ。

しかし、まだ問題があった……見た目は雑草の未知の作物を、しかも水溜りのなかに栽培することである。いくら、領主の身内の命令とはいっても難しいものがある。そこで、栽培が軌道に乗るまで領主に納める税の軽くし、支援をすることにした。すると、若い夫婦がコメをつくってくれることになった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お嬢様！わしらがやりますんで、大丈夫ですんで。」

マリスは、コメを作る夫婦や手伝いに来た近所の人に交じって田

んぼに入っていた。もちろん、田植えをするためだ。荒地を整備したり、田をおこすことは既存の農機具カラクリでできるが、田植えはまだ手作業である。

「毎年やっているから大丈夫ですよ。……苗は数本を一気に植えてください。」

マリスは、手に苗を持って答えた。貴族がいることでやりづらいことはマリスにも分かっていたが、最初なのでやりたいのだ。

アイガモもどきを入れることも考えて、一定の間隔をあけて田植えをしていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「これがコメなんですな。（見た目が雑草だけど）うまくてびっくりですわ。」

半日後、田植えが終わり、作業を行った人たちにマリスはおにぎり（馬車の保冷庫にいれておいた）を配った。具には、アイガモもどきの肉を刻んだものが入っている。

本当に食べられるのかと半信半疑で、雑草らしき謎の作物の植え替えを手伝った人たちも、おにぎりに満足しているようだ。

「ですが……。」

「何か問題でもありますか？」

何か問題があるようだが、言いづらいようだ。

「後で問題になるよりいいですから、言ってください。」

「すみません。この鳥なんですがね……ワシらが普通に焼いただけでは、硬い肉なんです。カラクリで全体を一気に焼かないとやわらかくならないんです。」

マリスの屋敷では、料理兼掃除係のオメガがカラクリオーブン（〇〇の宅急便にでてくるようなもの）で、アイガモもどきを調理していた。一般的に、貴族や金持ちの屋敷には置いてあるオーブンだが、庶民には普及していない。そのまま生で売り出しても、庶民には買い手がつかない。かといって、食肉のところに委託して燻製にしてもらっても硬いままだろう。

「ありがとう、参考になったわ。」

（これは、一度売り出し方を考えないといけないわ。）

――検討事項が増えたのだった。

３０．おにぎり（後書き）

ローブを受け取ったら、さくさくと生きたいと思っています。

31．一足遅かった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ローブ完成したわよ！」

マリスたちが、カルドーラの店に行くと、店の前にカルドーラが待ち構えていた。

「ありがとう！カル姉。」

「早速ですが、見せていただいてもよろしいかしら？」

「……見たい。」

三人とも、とにかく早く見たいようだ。

「もう、三人ともせっかちね」

カルドーラはウフっと笑うと、三人を店の中に案内した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

開店前の店の中には、マリスたちのローブがつるされていた。

「一番左のは、ロゼのね。希望通り、両袖に薬品とかが染み付かないように、吸収阻害剤で染めておいたのよ。」

全体的にデザインはあまり変わっていないが、肩から袖にかけて、ロゼのローブはラメがついたようになっていた。

「中央のが、ミゼルね。ミゼルのは、上と下を分けて上の部分を内側から補強してあるのよ。下はスカートになっているのよ。」

ミゼルのローブは、カラクリ作成のときに袖がすれたり、破片が飛んだりするかもしれないので分厚くなっている。下のスカートは、

ホコリがついてもすぐに払えるようになっていた。

「一番右はマリスのね。マリスのローブは見た目、普通のドレスだけど、袖がはずせるようになっているのよ。」

マリスのローブは、「寒暖の調節ができるように」というマリスの希望にあわせて、袖がはずせるようになっている。接続部分は見た目では分からないようになっている。見た目が普通のドレスのようにスカート部分がふんわりしているのは、スカートの下に乗馬用ズボンをはいても分からないようにするためである。

「思って以上の出来ですわね！」

ミゼルは、上着の部分を触っている。

「スカートの部分がかわいいわ。」

マリスは、スカートの部分をひらんと広げている。

「使いやすそう。」

ロゼは袖口を引っ張っている。

「三人とも、サイズはぴったりね。これでいいみたいね。お代は材料費だけいただくわよ。」

「これだけのものをつくってもらったのですから、きちんとお渡ししませんといけませんわ。」

「そうよ、カル姉。開店準備で忙しいときでしょう。」

忙しい開店準備中に、急いでつくってもらったのだ。いくら知り合いの頼みで、ミシンがあってもタダ同然では、割に合わないだろう。

「そのかわりに、学院で軽く宣伝してほしいのよ。この場所ね、一応学院街の中だけど、ちょっと学院から遠いじゃないの。まあ、王宮から比較的近いからいいんだけど、いくら私の斬新なデザインっていってもポッと出来たばかりの庶民の店には、貴族の人は来ないしね。だから、宣伝を頼みたいのよ。」

学院には、貴族の家の者や富裕層のものが多い。そこで知名度が上がれば、後々の上顧客になるに違いない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あれ？ミゼルは？」

マリスたちがカルドーラの店を出てからしばらくした後、ライゼルが店にやってきた。

「さっき、帰ったわよ。一足遅かったわね。」

カルドーラはテーブルで、紅茶を飲んで一服していた。そこへ、ライゼルがずかずかと大股で歩いてやってきて、カルドーラの肩をがしっとつかんだ。

「どうして、引き止めてくれなかったんだ！」

「こ、紅茶がこぼれるわよ！」

ライゼルは、つかんだカルドーラの肩を思いっきり揺すった。すると、案の定カルドーラが飲んでいた紅茶がこぼれて二人の顔や服にかかった。

「すまない。」

ようやく、ライゼルは我に返ったようだ。

「もう！これ、一張羅なのよ！」

そう言っているが、カルドーラの服には紅茶が全く染み込んでいない。

「あまり、服に染み込んでないな。……これって、この間頼まれた、特殊染料で染めたのかい？」

「ええ、どれくらい染まるか成功するまで染めてみたのよ。これは失敗だけどね。」

ロゼのローブに使われた染料は、特殊で一般人が手に入れられるものではない。そのため、ライゼルに入手を頼んだのだ。ライゼルが直にミゼルに渡し、ロゼが使用すれば規定違反になるが、この場合は違反にはならない。

「失敗って……さっき一張羅って言ってたじゃないか。まあ、僕も染料については専門外だからどれくらい効力があるかわからないけれど、これで『失敗』なのか？」

「ライが持ってきてくれたのが、最高級の物だったからよ。普通のは、飲み物を弾く程度よ。出来上がったローブの方はもっとすごいわよ。……いくら、ライでもよく手に入れられたわね。」

「大事なミゼルの友人が使うものだからね。間違って、友人がケガしてミゼルが悲しんだら大変じゃないか。」

ライゼルの世界の中心には、いつもミゼルがいる。

「もちろん、ミゼルやもう一人の子に用意した材料も最高級のものだけどね。」

「ライが材料を用意したって感付かれないために、材料費って言って少しもらったけど良かったの？」

カルドーラは、ライゼルと自分に新しい紅茶を入れながら聞いた。この国の紅茶は茶葉を発酵させたものではなく、『紅茶』という茶の品種である。初めから、葉が赤くなっているものを収穫する。

「ああ、あんまりべったりすぎると、最近ミゼルが過保護だって言っていやがるんだ。だから、最近は自重しているんだ。お兄ちゃんは悲しいよ。」
ライゼルは今でも十分シスコンだ。そのあたりにライゼルは全く気づいていないことが非常に残念である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――――翌日、ローブの改造期限の日、教室には色とりどりのローブで溢れていた。背中の紋章を傷つけなければいいという条件なので、さまざまな形のローブがあった。

極端なものでは、丈が紋章の部分までしかなかったり、色がはげていたり、首が鳥の羽で飾られていたりという感じである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「えー、では、課題のローブの確認を行う。ワシの前に一列に並ぶのじゃ！」
教授が教室にやってきて開口一番にそう言うと、皆適当な順に並んでいった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

かなり時間はかかったが、全員何とか課題の確認が終わった。
中には、規定違反のもの（紋章が漂白剤ではげてしまっている、自前の使用人に鳥の羽をつけさせた、学院街の外の職人に委託した、等）があったが概ね全員合格だった。

31．一足遅かった（後書き）

主人公マリスやミゼルの口調が難しいです。
マリス→貴族風の口調
ミゼル→箱入り貴族
ロゼ→基本無言、単語で話す。

ライゼルのほうがよく動いてくれます。

＊お知らせ＊

報告が大変遅れて申し訳ありません。

しばらく休載したいと思います。

更新しようと思っても、通勤時間が多くなったことと多忙になったため、話を書く時間がなくなってしまったためです。

電車の中で携帯でうつことも無理のようです。（この話が思ったより複雑になってきたため）

再開は８月末～９月くらいになりそうです。

パワーアップして戻ってくる予定でありますので、読者の皆様、しばしの間お待ちくださいませ。

＊＊今後の話の予定（大幅なネタばれあり・ドッキリもあるよ）＊＊

予定でありますので、多少の変更はございます。

・学院内で揉め事！？
・国家転覆の危機！？継承権争いにこっそり巻き込まれるかも？
・出店によって、大忙し。
・社交界デビュー。
・社交界はとても怖いところでした。
・マリスも一応貴族なので、結婚しなくては……で、だれと？（予定の人物はもうでてきています。）
・↓ミゼルとかもそうだよね。（ミゼルの相手もすでにフルネーム

で出ています。せりふあり。）

・農地改革して畑を広げたいマリス。でもお金がない。

と言った感じです。

前に番外編でこっそり出てきたなぞの４人組も話の中で重要人物になってくるのでヨロシクです。（彼らが出てきた話のＰＶとかがなぜか高いです。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2500o/

とりあえず、畑でもつくろうかな

2011年6月25日14時57分発行